

## 明末清初におけるマンチュリア史研究の現状と課題(下)

### Reviewing the Historial Studies of Manchuria in the Late Ming and Early Qing Eras (2)

塚 瀬 進\*

Susumu TSUKASE

#### 目次

1. 戦前の研究動向
2. 戦後から1960年代にかけての研究動向
3. 1970年代から90年代にかけての研究動向
4. 2000年以降の研究動向 以上前号
5. 中国での研究 1950～60年代 以下本号
6. 中国での研究 70年代末～90年代
7. テーマ別による考察
  - ①ヌルハチ期・ホンタイジ期の問題
  - ②朝鮮・モンゴルとの関係
  - ③八旗制・満洲人について
  - ④清朝に帰順した漢人と明朝側で活躍した人物
  - ⑤産業政策・民族政策・軍事史
  - ⑥開国説話・史料について

おわりに

#### 5. 中国での研究—1950～60年代

中国では、ヌルハチが台頭した社会経済的な要因、女真・満洲人の発展段階に関するテーマが多く取り上げられた。

張維華(1)は1954年に満洲社会に関する論文を発表し、基本的には奴隸制から封建制に向かっていたと指摘した。王鍾翰(2)は、ヌルハチ期について分析し、氏族社会末期の段階ではなく奴隸制であったが、遼東占領(1621年)から入関までは奴隸

制から封建制への過渡期であったと主張した。次いで、ホンタイジ期の検討をおこない、封建制が確立する過程にあったと指摘した(3)。莫東寅(4)は、建州女真が興隆した背景、ヌルハチ勃興の経緯、八旗制度の形成について考察した。孟森(5)はヌルハチの事跡について考察し、張鴻翔(6)はヌルハチが明朝からいつ、どのような官職を受けていたのか考察した。

60年代に入ると、女真社会が奴隸制から封建制へどのように移行したのか、議論がおこなわれた。李燕光(7)は、遼東占領以前では土地売買に関する史料は見られないこと、奴隸が確認されることなどから奴隸制社会の発展した段階であり、遼東占領後に封建制へ移行したと主張した。鄭天挺(8)は、ヌルハチの台頭により封建制へ転化したのが、封建制の初期段階であり、奴隸制や氏族制の残滓が存在したと主張した。李旭(9)は八旗制について、孫文良(10)はヌルハチ期の状況について考察した。

ヌルハチの勃興から入関までのマンチュリア史に関する研究は進展したが、文化大革命により研究は中断を余儀なくされた。中国での研究が再開するのは、1970年代末まで待たなければならない。

台湾では李光涛(11)が、ホンタイジ期の政治外交史やマンジュ国・清朝と明朝との抗争に関する研究を発表した。陳文石(12)は、入関前の農業、手工業の状況について考察を加えた。また、ホン

\*環境ツーリズム学部教授

タイジ期の各旗・六部の重要人物の出自について検討し、これらの人物はみな有力氏族で占められていたこと、こうした人物の登用は勢族の政権参加と旗王への牽制であったと主張した(13)。1971年には八旗制に関する論文も出している(14)

黄彰健(15)は、1967年にヌルハチ期に関する論文を五本発表した。いずれもヌルハチ期の基本的な事実を考証した内容である。その考証の適否については松村潤が検証している(16)。李学智(17)は、「尼堪」の語義についてや、「満文老档」の原本である「満文原档」の記述をもとに、「牛泉」、「固山」、「八和碩貝勒」の原義について考察した。また、ホンタイジが朝鮮に対して満洲人の返還を求めたことについて考察するとともに、中央研究院歴史語言研究所所蔵の関係档案を掲載している(18)。

管東貴(19)は、入関前の満洲人の動向や兵数・人口について考察し、入関前の満洲人人口は75～80万人だと推計した。李宗侗(20)は中央政権の変化について考察している。軍事史では、李光壁(21)、任長正(22)が明朝との戦闘経過に検討を加え、王崇武(23)はサルフの戦いについて考察した。

以上のような研究成果が中国、台湾では出され、とくに女真・満洲人の発展段階について諸見解が主張された。張璇如(24)が1982年におこなった研究整理によると、1950年代前半まではヌルハチ期は奴隸制、ホンタイジ期になり封建制に移行したとする見解が支持されていた。1950年代後半以降では、満洲人は奴隸制から封建制に向かっていた点に疑問はないが、奴隸制と封建制の画期はヌルハチのハン即位(1616年)なのか、遼東占領(1621年)なのか見解が分かれた。そして文革による中断を経て、1970年代末以降では多くの見解が出され、議論は継続しているとまとめている。

- (1) 張維華1954
- (2) 王鍾翰1956
- (3) 王鍾翰1957a
- (4) 莫東寅1958a、1958b
- (5) 孟森1959
- (6) 張鴻翔1950
- (7) 李燕光1961
- (8) 鄭天挺1962
- (9) 李旭1964

- (10) 孫文良1962、1964
- (11) 李光濤1947a、1947c、1947d、1948b
- (12) 陳文石1961、1962
- (13) 陳文石1968
- (14) 陳文石1971
- (15) 黄彰健1967a、1967b、1967c、1967d、1967e
- (16) 松村潤1968
- (17) 李学智1963、1974
- (18) 李学智1968
- (19) 管東貴1968、1969
- (20) 李宗侗1967
- (21) 李光壁1957
- (22) 任長正1960
- (23) 王崇武1947
- (24) 張璇如1982

## 6. 中国での研究—70年代末～90年代

閻崇年(1)は、1977年にヌルハチに関する論文を発表し、その後もヌルハチの研究を続け、1983年には伝記を刊行した。次いで、入関前の農業生産について検討し、対明断行までは明朝との馬市により鉄製農具、耕牛を入手して農業生産を高め、遼東占領後は「計丁授田」、「分丁編庄」などの農業政策を軸に農業生産を推進したと指摘した(2)。90年代以降では、袁崇煥や明朝との戦闘に関する優れた論文を発表している(3)。

周遠廉(4)は、1979年から80年にかけて五本の論文を発表して、女真・満洲人が奴隸制から封建制へどのように変化したのか、その変化の原因、方向性について分析した。1979cでは「遼東档案」中の馬市交易(万暦年間)の文書を分析して、女真は米などの農産物は購入せず、むしろ販売していた記述があるので、食糧生産は十分なレベルにあったと判断した。土地売買、土地没収や、土地が分与された記録は未確認なので、1540～80年代では土地私有制は未確立であったと解釈した。そして、奴隸の存在は萌芽的であったと評価して、奴隸制社会以前の原始社会の末期段階にあり、ヌルハチ挙兵後に奴隸制社会に入ったと指摘した。次いで、1980a、1980bでは入関前の満洲人社会について検討を加え、遼東占領以前は奴隸制社会であったと主張した。その後はヌルハチ期のおこなうとともに、ヌルハチの伝記やマンジュ

国・清朝に関する概説書を書いている(5)。

李鴻彬(6)は、遼東占領後に満洲社会は封建農奴制に転化したとする論文を1979年に発表し、その後マンジュ国・清朝に関する研究や明朝との関係や戦闘についての論文を次々に発表した。そして、その成果をもとに二冊の著作を刊行している(7)。

明代史を中心に研究していた李洵(8)は、1978年に発表した論文において女真の農業、商業、奴隷の使用状況について検討を加え、女真社会は奴隷制から封建制に向かっていたと主張した。しかし奴隷制による農業生産を基本にしていたとまでは考えていない。奴隷の存在をどのように考えるのかが、女真社会の性格規定の一つの争点になっている。また、1990年には明朝の遼東政策に関する論文も発表している(9)。

滕紹箴(10)は、1980年にヌルハチに関する論文を発表し、その後もマンジュ国・清朝に関する研究を続けた。1982aでは入関前の社会経済状況について考察し、土地は公有制であったが、農業生産は奴隷によりおこなわれた奴隷制社会であり、それが封建制に向かっていった過渡期が入関前の状況であったと主張した(11)。これらの研究をもとに、1985年にはヌルハチの伝記を刊行した(12)。1988年にはヌルハチ政権の社会構造を分析して、嘉靖、隆慶年間に女真社会は族寨を拠点にした部族連盟の段階に達しており、国家が出現する条件がかなり整っていた。ヌルハチは周辺勢力の征服をすすめるとともに、集団内部の組織化(八旗制の整備、充実)をおこない強大化し、政権は新興貴族奴隷主により構成され、奴隷制に依拠した政権であったと主張した(13)。

郭成康(14)は、80年代以降、マンジュ国・清朝に関する研究を次々に発表した。八旗制、農業政策、対モンゴル政策などについて優れた考察をおこなった。そして1988年に張晋藩と共著で『清入関前国家法律制度史』を刊行した(15)。この著作は、入関前の国家制度、八旗制、刑法、訴訟制度について水準の高い叙述をしており必読の書籍である。

文革以前に論文を発表していた研究者も活動を再開した。鄭天挺(16)は再び入関前の満洲社会の性質について論じ、ヌルハチは漢人との交流のなかで先進的な技術、文化を習得して強大化した点

を重視して、ヌルハチ政権は封建制権力であったと主張した。また、満洲人が統合されていく過程について考察した(17)。孫文良(18)は、1980年以降に明朝との戦闘や満洲人の勃興に関する研究を発表した。それらの成果のほとんどは1992におさめられている(19)。また李治亭と共著でホンタイジの伝記も刊行した(20)。

朱誠如(21)は、1982年にヌルハチが明朝に不満を持つ要因となった「遼東“棄地”」についての論文を発表した後、マンジュ国・清朝に関する研究も発表した。1983年の論文では、女真は漢人との交流、交易を通じて変容し、満洲人を形成したと主張した。言い換えるならば、純粋な満洲人などは存在せず、歴史的な経過のなかで満洲人は創出されたと指摘している(22)。

陳佳華(23)は、80年代に八旗制に関する研究、とくに八旗漢軍やニルの分析をおこなった。1981aではニルの数からマンジュ国の人口を推計して、1616年ごろの人口は35万人程度であったとした。また八旗制に関する詳細な研究史をまとめており、必読の論文である(24)。主に清代史を研究する白新良(25)も、80年代以降八旗制やマンジュ国・清朝の政治史について優れた論文を発表している。

陳生璽(26)は、80年代にマンジュ国・清朝と明朝との戦い、それに参加した人物(毛文龍、洪承畴)について考察するとともに、モンゴルとの関係についても考察した。姜守鵬(27)も、マンジュ国・清朝と明朝との抗争、その過程で登場した漢人武将の動向について研究をおこなった。

何溥澐(28)は、満洲人の社会状況について考察し、ヌルハチ期は奴隷制であり、ホンタイジ期は封建制へ転化する過渡期であったとしている。またホンタイジの統治理念についても検討している(29)。趙展(30)も、満洲人の社会状況について考察し、女真社会は奴隷制であったが、1621年の遼東占領後に封建農奴制へ向かったと主張した。晏路(31)は、80年代までの「満族」に関する研究論文を目録化している。

李治亭(32)は、入関前の民族政策やホンタイジによる黒龍江方面への遠征について考察した。羅継祖(33)は、17世紀初頭に遼東の漢人らがヌルハチ、ホンタイジの統治に抵抗したことについて検

討した。

以上の80年代までの研究動向を概括的にまとめるならば、女真・満洲人の社会発展の状況、八旗制の分析、明朝との抗争に関する政治外交史の研究が進展したと言えよう。

90年代以降、中国では研究者の人数が増えたことから、発表される研究の数も増加した。刁書仁(34)は、80年代末から明代～清末のマンチュリア史について、精力的に論文を発表している。刁書仁の研究は、明代の女真史、明代・清代の中朝関係史、清代の土地制度史・政治制度史に大別できる。ここではマンジュ国・清朝に関係する研究について取り上げたい。ヌルハチやフルン女真の研究をするとともに、女真の村落組織が八旗制のニルへとどのように移行したのかを検討した。まず女真の村落組織であるガシヤンについて考察し、1601年のニル編成以後では戦闘力を強化するため、旧来のガシヤンはニルへと組織化されていったと主張した。最近ではホンタイジがどのように漢人を政権に取り込んでいったのかを考察している(35)。中朝関係史の研究については後述する。

杜家驥(36)は、八旗制について優れた研究を出している。とくに旗王について検討を加えた論文を80年代末から90年代にかけて出した。これらの成果をふまえて1998年に著作を刊行し、八旗制下ではハンと旗王は合議によって物事を決定するとともに、国政参与権や財産の保有は八旗で均分されていたと主張して、これを「八分体制」と称した(37)。2008年にも著作を出して八旗制の形成と発展について考察している(38)。これらの研究において、杜家驥は八旗制が分権的、連旗的な構造であったことを主張している。

趙令志(39)は、入関前後の旗地について研究をすすめる、ホンタイジ期の旗地政策、ヌルハチがおこなった「計丁授田」について考察を加えた。それらをもとに2001年に著作を刊行した(40)。入関前の満洲人の農業生産関係は奴隸制が主であったが、部分的に農奴制も存在しており、奴隸制から封建制に向かう過渡期であったと主張した。

姚念慈(41)は、政治制度史について優れた考察をおこなっている。1991年には、遼東攻略後に置かれた漢人事務の担当官であった都堂について考察した。ヌルハチの勢力が拡大するにつれて配下

の漢人は多数に達したことから、漢人を管轄する都堂の権限も伸張した。1622年の官職改正時に都堂は強い権限を持つに至り、老齢化した五大臣に代わる官職となったが、1623年に都堂の持つ権限は八王へと移り、都堂は政権の中枢ではなくなった経緯を明らかにした。次いで六部の役割について分析を加え、1631年の六部設置を、八旗制に基盤を置いた「八王共治制」から官僚制に基盤を置いた皇帝専制政治への移行をはかった画期点だと指摘した。しかし天聰年間では重要案件の決定は八旗貝勒がしており、六部長官は参与できなかった。例えば、官員の任命は八旗の序列のなかで決まるところが大きく、某旗の旗人の退職後は、その旗の旗人が受け継ぐ形式でおこなわれ、官員任免を司る吏部に決定権はなかった。また、旗人の事件に関しては刑部独自の判断では処理できず、刑部の司法権には限界があった点を明らかにした(42)。

劉小萌(43)は、女真社会の内部構造であるハラ、ムクン、ガシヤンの状態、およびその崩壊過程について詳細な分析を加えた。その論旨を理解するには、日本語訳の論文が参考になる(44)。その一方で、マンジュ国・清朝政権の政治権力のあり方を考察した(45)。これらの成果をもとに、女真がどのように部落から国家へと成長していったのか、その過程に関する著作を刊行した(46)。この著作は女真社会の内部構造を明らかにし、そうした内部構造が女真を取り囲む外部情勢の影響を受け、どのように変容して国家へ移行したのかを考察、叙述した優れた研究である。

(1) 閻崇年1977、1978、1983a、1983b、1983c

(2) 閻崇年1984

(3) 閻崇年1984、1989、1994、1995a、1995b、1995c、1997、2003、2005

(4) 周遠廉1979a、1979b、1979c、1980a、1980b

(5) 周遠廉1980c、1981a、1981b、1986、2004、2006

(6) 李鴻彬1979a、1979b、1980a、1980b、1981a、1981b、1981c、1982、1983a、1983b、1984a、1984b、1984c、1987a、1987b、1992、1997a

(7) 李鴻彬1997c、2003

(8) 李洵1978

(9) 李洵1990

(10) 滕紹箴1980a、1980b、1982b、1986

- (11) 藤紹箴1982a
- (12) 藤紹箴1985
- (13) 藤紹箴1988
- (14) 郭成康1981、1982a、1982c、1982d、1985a、1985b、1987a、1987b
- (15) 郭成康1988
- (16) 鄭天挺1979
- (17) 鄭天挺1980
- (18) 孫文良1980、1982、1986、1990
- (19) 孫文良1992
- (20) 孫文良1983
- (21) 朱誠如1982、1985、1999
- (22) 朱誠如1983
- (23) 陳佳華1980、1981a、1981b、1982a、1982b、1984a
- (24) 陳佳華1984b
- (25) 白新良1981a、1981b、1982、1983、1998
- (26) 陳生璽1983、1987、1988a、1988b、1989、1991、1993、1995
- (27) 姜守鵬1984a、1984b、1986、1987b、1988、1989、1992、1995
- (28) 何溥滢1979
- (29) 何溥滢1990
- (30) 趙展1980
- (31) 晏路1988
- (32) 李治亭1981、1983
- (33) 羅繼祖1981
- (34) 刁書仁1987、1990a、1990b、1993
- (35) 刁書仁2011
- (36) 杜家驥1987、1991、1997
- (37) 杜家驥1998
- (38) 杜家驥2008
- (39) 趙令志1995、1997
- (40) 趙令志2001
- (41) 姚念慈1991
- (42) 姚念慈1993、2008
- (43) 劉小萌1990a、1990b、1991b、1992、1995a、1996a
- (44) 劉小萌1996b
- (45) 劉小萌1991b、1991c、1995b
- (46) 劉小萌1995。その後書名を変更して刊行された2001、2007

## 7. テーマ別による考察

### ①ヌルハチ期・ホンタイジ期の問題

ヌルハチの勢力拡大については、閻崇年(1)、王冬芳(2)、高慶仁(3)が考察している。明朝との関係については劉丹(4)が、経済関係については佟錚(5)が検討している。王景沢(6)は野人女真との関係から考察している。ウラとの抗争については刁書仁(7)、陳陶然(8)が考察している。董万倫(9)は、ヌルハチが征服した「瓦爾喀部」の「安楚拉庫」と「内河」はどこにあったのかを『他塔喇氏家譜』を使い、図們江上流の左岸にあったと主張した。蒙林(10)は、ソロンとの関係について考察している。ヌルハチ政権の特質については、藤紹箴(11)、謝景芳(12)が検討している。

ヌルハチがおこなった政策で注目されるのは、服属した人々を自己の勢力圏内に移動させて八旗に編入した点である。征服の目的は領土、土地ではなく、軍事力、労働力となる人間の獲得を重視していた。こうしたヌルハチの政策は徙民政策と呼ばれ、松浦茂(13)が先駆的に考察した。また、劉小萌(14)、張佳生(15)、張隱剛(16)も考察している。とくに張佳生は徙民政策により、どれくらいの人々が八旗に編入されたかについて優れた考察をしている。

ヌルハチと関係の深かった人物の研究もおこなわれている。ヌルハチの弟であったシュルガチは、政権初期にはヌルハチと同等の権力を持っていたと考えられている。しかしヌルハチにより排斥され、死去する生涯をおくった。シュルガチは初期政権の性格を考えるうえで重要な人物のため、多くの研究が出されている。日本では鴛淵一(17)、松村潤(18)が、中国では孟森(19)、陳捷先(20)、馮年臻(21)、劉德鴻(22)、単鈴(23)、陳永祥(24)、刁書仁(25)が考察している。ヌルハチの長子であったチュエンは、一度は後継者に指名されたが、不適切な言動が多く、やがて幽閉され死去した。チュエンについては、鴛淵一(26)、李景蘭(27)、周遠廉(28)、辺佐卿(29)、閻崇年(30)が考察している。ヌルハチの第二子であったダイシャンについては、陳宛(31)、岑大利(32)、朱誠如(33)が考察している。イエヘからヌルハチに嫁いできた「東哥格格」については、高慶仁(34)が検討している。

ヌルハチはその都城を頻繁に移動していた。都

城の構造や、移動の理由、背景についても研究がおこなわれている。戦前では、戸田茂喜(35)が都城の移動やフェアラ城の構造について考察している。鴛淵一(36)は、ジャイフィヤン城について検討した。稲葉岩吉(37)はフェアラ城を訪れた時の記録を、高橋匡四郎(38)はヌルハチ関係の都城を実地調査した報告書を残している。村田治郎(39)は、瀋陽の宮殿について調査、考察した論文を発表した。戦後では都城の史跡を調査した報告書が出されており参考になる(40)。また三宅理一(41)による研究も出された。

中国で都城を全般的に考察した研究としては、白洪希(42)、鉄玉欽(43)、蘭書臣(44)、王禹良(45)がある。瀋陽については、瀋陽故宮博物館(46)、王軼(47)、王雁(48)が考察している。フェアラ城については劉暢(49)が、ヘトアラ城については曹徳全(50)が、サルフ城については李景蘭(51)が、遼陽については李景蘭(52)が検討している。

ホンタイジについては、金成基(53)がその人物像を、杜家驥(54)はその出身を、王思治(55)は即位事情や有力者との矛盾を考察している。魏鑿勛(56)はホンタイジ政権がいかなる特質を持つ政権であったのか考察を加え、孟昭信(57)は、ホンタイジが実施した政治・軍事改革について検討した。高慶仁(58)は、ホンタイジの官吏への対応について考察した。楊珍(59)は八王共治制をとりあげ、これは八王の権限拡大も招いたが、八王が相互に監督、牽制するようにもなったことから、ハン権力の強化に貢献したという興味深い論点を主張している。制度改革を検討した研究として、沈一民(60)は「啓心郎」の職制について考察した。また、沈一民(61)は1629年におこなわれた考試の実施背景、意義についても考察している。漢人との融和については、魏鑿勛(62)、朱誠如(63)、沈一民(64)、刁書仁(65)が検討を加えている。

明朝との関係や戦闘に関する研究もおこなわれている。明朝との関係については、滕紹箴(66)、李鴻彬(67)、張国光(68)が考察している(軍事史の部分も参照)。山海関を迂回して華北に侵攻したことについては謝景芳(69)、沈一民(70)が、済南城の占拠については山根幸夫(71)が検討している。劉厚生は档案を使い、1635年前後の状況を明らかにした(72)。

ホンタイジはアムール川方面への勢力拡大をはかっていた。その経過については、呂光天(73)、李治亭(74)、郭成康(75)、那曉波(76)が考察している。ソロンの征服については烏雲達寶(77)、古清堯(78)、閻崇年(79)が、ダホールの征服については王鍾翰(80)、劉金明(81)が考察している。吉田金一(82)は、1639年のソロン征伐の時に清朝はアムール川左岸に守備隊を置き、その後もこの守備隊は駐留を継続していたと主張した

張玉興(83)はホンタイジ期に活躍した武将岳訖について、戚福康(84)は周辺との交易関係について、劉慶宇(85)は仏教政策について考察した。

- (1) 閻崇年1989
- (2) 王冬芳1992
- (3) 高慶仁1993
- (4) 劉丹1978
- (5) 佟錚1987
- (6) 王景沢1997
- (7) 刁書仁1987
- (8) 陳陶然2011
- (9) 董万倫1983
- (10) 蒙林1989
- (11) 滕紹箴1988
- (12) 謝景芳1990
- (13) 松浦茂1986
- (14) 劉小萌1991d
- (15) 張佳生2007
- (16) 張隱剛2009
- (17) 鴛淵一1932
- (18) 松村潤1983
- (19) 孟森1959a
- (20) 陳捷先1963
- (21) 馮年臻1985
- (22) 劉徳鴻2000
- (23) 単鈴2000
- (24) 陳永祥2009
- (25) 刁書仁2009
- (26) 鴛淵一1933
- (27) 李景蘭1986
- (28) 周遠廉1986
- (29) 辺佐卿1994b
- (30) 閻崇年2004a
- (31) 陳澆1984

- (32) 岑大利2005  
 (33) 朱誠如2002b  
 (34) 高慶仁2000  
 (35) 戸田茂喜1937-38、1938  
 (36) 鴛淵一1941  
 (37) 稲葉岩吉1939a  
 (38) 高橋匡四郎1941  
 (39) 村田治郎1933  
 (40) 松村潤1988、神田信夫1989、細谷良夫1990b  
 (41) 三宅理一2009  
 (42) 白洪希2007  
 (43) 鉄玉欽1982  
 (44) 蘭書臣2005  
 (45) 王禹良2008  
 (46) 瀋陽故宮博物館1976  
 (47) 王軼2004  
 (48) 王雁2009  
 (49) 劉暢2002  
 (50) 曹徳全2005  
 (51) 李景蘭1987  
 (52) 李景蘭1985  
 (53) 金成基1979a  
 (54) 杜家驥1998a  
 (55) 王思治1984a、2005  
 (56) 魏鑿勛1980  
 (57) 孟昭信1981b  
 (58) 高慶仁1991、1995  
 (59) 楊珍2000  
 (60) 沈一民2006  
 (61) 沈一民2011  
 (62) 魏鑿勛1979  
 (63) 朱誠如1987  
 (64) 沈一民2003  
 (65) 刁書仁2011  
 (66) 滕紹箴1982b  
 (67) 李鴻彬1983a  
 (68) 張国光1982  
 (69) 謝景芳1988、1995  
 (70) 沈一民2007  
 (71) 山根幸夫2002  
 (72) 劉厚生1995  
 (73) 呂光天1981、1982  
 (74) 李治亭1983

- (75) 郭成康1981、1985a  
 (76) 那曉波1986、1987  
 (77) 烏雲達賚1987  
 (78) 古清堯1994  
 (79) 閻崇年2004b  
 (80) 王鍾翰1957  
 (81) 劉金明1989  
 (82) 吉田金一1978  
 (83) 張玉興1985  
 (84) 戚福康1997  
 (85) 劉慶宇2008

## ②朝鮮・モンゴルとの関係

戦前では、稲葉岩吉(1)は光海君治世下(1609～23年)での、朝鮮とマンジュ国・清朝との関係について考察した。浦廉一(2)は、日本との関係にも留意したマンジュ国・清朝と朝鮮との関係について論じた。田川孝三(3)は、ホンタイジ期に瀋陽に人質として連れてこられた朝鮮の人たちの動向について考察した。また、既述した鴛淵一(4)による研究もある。

戦後になると、鴛淵一(5)は『瀋陽状啓』(瀋陽に留置された人たちが、朝鮮本国に送った報告)、「朝鮮国来書簿」(天聰年間に朝鮮が清朝に送った文書)、「各項稿簿」(天聰年間に清朝が朝鮮に送った文書)の分析をおこない、マンジュ国・清朝と朝鮮との関係について考察を加えた。

江嶋壽雄(6)は、これまでマンジュ国・清朝は国内の貧弱な物資、明朝との貿易途絶による経済的苦境を補うため、朝鮮に多大な歳幣を課したとされてきたが、果たしてそうなのか、歳幣の具体的な内容について検討した。天聰年間の歳幣について検討した結果、その内容はたいしたものではなく、朝鮮の歳幣がマンジュ国・清朝の経済力の増強に貢献したかどうかは疑問だと主張した。次いで崇徳年間の歳幣について検討し、丙子の乱後に歳幣は増額されたので朝鮮はその負担に苦しんだが、1643年にホンタイジが死去し、翌44年には入関したことから、清朝の朝鮮への要求も変わった。もはや朝鮮に過度の物資を要求する必要性はなくなり、朝鮮への歳幣は大きく減額されたと主張した(7)。

森岡康(8)は、マンジュ国・清朝と朝鮮との戦争

により捕虜になった朝鮮人について精力的に検討を加えている。荷見守義(9)は、文禄・慶長の役に際して、ヌルハチが助兵を申し出た事実はあるのかどうかについて検証した。桂勝範(10)は、文禄・慶長の役とヌルハチの勢力拡大との関係について考察した。

ヌルハチの勢力拡大に朝鮮も無関心ではいられなくなり、使者を派遣してその情勢をさぐっていた。使者の申忠一は、1595年末から翌96年正月にかけてヌルハチのもとを訪れた。その際に朝鮮からヌルハチの居城に至る道程について史料を残しており、当時のヌルハチの状況を考察するうえで貴重な材料となっている。申忠一の派遣については、稲葉岩吉(11)、三田村泰助(12)、刁書仁(13)、劉広銘(14)、宋慧娟(15)が検討している。また、マンジュ国・清朝との関係からではないが、明朝との関係調整のために、1620年に明朝へ派遣された李廷龜の動向について考察した、張徳信(16)、鈴木開(17)の論文も参考になる。

以下では、台湾、中国での研究について見てみたい。台湾での研究には、劉家駒(18)がマンジュ国・清朝と朝鮮との関係、とくにホンタイジ期について考察している。また、陳捷先(19)も研究をしている。

中国では、ヌルハチ期については、刁書仁(20)、魏志江(21)、温淑萍(22)が考察している。豊臣秀吉による「朝鮮出兵」が与えた影響についてはあまり研究されていなく、孫与常(23)が遼東の人々の動向について、李新成(24)がこの時活躍した李如松について考察している。王臻(25)は、豊臣秀吉による「朝鮮出兵」への対応に明朝、朝鮮は追われてしまい、ヌルハチの勃興を助けたという見解を主張している。「サルフの戦い」前後の関係については、白新良(26)、刁書仁(27)、王臻(28)、文鐘哲(29)、高志超(30)が検討している。李賢淑(31)は、仁祖の方針に不満を持った韓潤がヌルハチに投降したことにより、ヌルハチは朝鮮の内情を知ったことについて考察している。

ホンタイジ期の朝鮮との関係を全般的にあつかった研究には、張存武(32)、李治亭(33)、晁中辰(34)がある。「丁卯之役」、「丙子之役」については、李鴻彬(35)、陳捷先(36)、徐凱(37)、李善洪(38)、刁書仁(39)、魏志江(40)、王臻(41)が考察

している。謝肇華(42)は『各項稿簿』の分析をおこない、王艷春(43)は瀋陽に人質として囚われていた朝鮮王室の人々について考察し、宋慧娟(44)はホンタイジが朝鮮に課した負担について考察した。

マンジュ国・清朝と朝鮮との交易、経済関係を考察した研究には、肖瑤(45)、王臻(46)、張杰(47)がある。朴今海(48)は、マンチュリアに流入した朝鮮人が及ぼした影響について考察した。明朝と朝鮮の経済関係については、高艶林(49)が豊臣秀吉の朝鮮侵略により打撃を受けた朝鮮は、明朝に鴨緑江岸での「中江関市」の開設を申し入れて認められ、1613年まで続いた経緯について検討を加えている。呉一煥(50)は、明朝、マンジュ国・清朝、朝鮮間の海上輸送、遼東から朝鮮へ逃れた明朝の人々の動向について考察した。

モンゴルとの関係について、戦前では鴛淵一(51)、田中克己(52)がヌルハチ期の関係について考察している。戦後では森川哲雄(53)が、1634年のリグダン・ハーンの死後、内モンゴルが清朝の支配下に入っていく過程を考察した。松村潤(54)は1635年のホンタイジによるチャハル部征討を取り上げ、チャハル部を降して「大元伝国の璽」を得た過程について考察した。岡田英弘(55)は、マンジュ国・清朝にモンゴル文化がどのような影響をおよぼしていたのか論じている。岡洋樹(56)は、ホンタイジ期におこなわれた内モンゴル諸部のジャサク旗への編成は、既存のモンゴル社会の構造にそくして組織されており、再編や解体ではなかったと主張した。マンジュ国・清朝がモンゴル勢力を取り込む過程については、既述した楠木賢道の研究がもっとも優れている。

中国の研究では、趙雲田(57)、魏鑿勳(58) 陳生璽(59)が概括的な動向について考察している。白鳳岐(60)は、ヌルハチ期・ホンタイジ期の対モンゴル政策を、科爾沁部、喀爾喀部、察哈爾部ごとに分けて考察している。ヌルハチ期については張羽新(61)が、①攻守同盟、②婚姻政策、③投降モンゴル人の優遇、④モンゴル人王侯のヌルハチ政権への参加、⑤チベット仏教の保護の側面から考察している。ホンタイジ期については、王佩環(62)、郭成康(63)、袁森坡(64)、関樹東(65)、白洪希(66)、達力扎布(67)が考察している。マンジュ国・清朝

と地理的に近い関係が緊密であったコンチンとの関係については、宝日吉根(68)、金元山(69)、湯代佳(70)、巴根那(71)、周喜峰(72)、敖拉(73)が考察している。

マンジュ国・清朝皇室とモンゴル人との婚姻については、岑大利(74)、劉潞(75)、杜家驥(76)が考察しており、とくに杜家驥の著作は優れている。札奇斯欽(77)は、ヌルハチ期から三藩の乱まで、どのくらいのモンゴル兵がマンジュ国・清朝に参加していたかを考察した。李勤璞(78)は、ヌルハチ・ホンタイジや遼東の明朝関係者のもとを訪れて、さまざまな折衝をしていたモンゴル人ラマの動向について考察している。劉小萌(79)、閻崇年(80)は、モンゴル文化の影響について検討している。達力扎布(81)は、ジャサク旗の設置について分析するとともに、モンゴル語档案の漢語訳に取り組んでいる。

- (1) 稲葉岩吉1933
- (2) 浦廉一1934、1950
- (3) 田川孝三1934
- (4) 鴛淵一1928
- (5) 鴛淵一1957、1968a、1968b
- (6) 江嶋壽雄1969
- (7) 江嶋壽雄1972
- (8) 森岡康1964、1966、1983、1984、1985、1988
- (9) 荷見守義2006
- (10) 桂勝範2008
- (11) 稲葉岩吉1937、1939b
- (12) 三田村泰助1965
- (13) 刁書仁2001
- (14) 劉広銘2004
- (15) 宋慧娟2011
- (16) 張徳信2007
- (17) 鈴木開2009
- (18) 劉家駒1976、1983
- (19) 陳捷先1995a
- (20) 刁書仁2004
- (21) 魏志江2007b、2008
- (22) 温淑萍2008
- (23) 孫与常1985
- (24) 李新成2011
- (25) 王臻2009
- (26) 白新良1997
- (27) 刁書仁2001b
- (28) 王臻2006
- (29) 文鐘哲2008
- (30) 高志超2009
- (31) 李賢淑2008
- (32) 張存武1969
- (33) 李治亭1995
- (34) 晁中辰1995
- (35) 李鴻彬1987b
- (36) 陳捷先1992、1995b
- (37) 徐凱1994
- (38) 李善洪1995
- (39) 刁書仁2001c
- (40) 魏志江2007a
- (41) 王臻2008a、2009b
- (42) 謝肇華2000
- (43) 王艷春2008
- (44) 宋慧娟2009
- (45) 肖瑤2001
- (46) 王臻2002、2008b
- (47) 張杰2008
- (48) 朴今海2004
- (49) 高艷林2006
- (50) 呉一煥2007
- (51) 鴛淵一1935
- (52) 田中克己1940
- (53) 森川哲雄1990
- (54) 松村潤1992
- (55) 岡田英弘1994
- (56) 岡洋樹2007
- (57) 趙雲田1980
- (58) 魏鑿勛1982
- (59) 陳生璽1987
- (60) 白鳳岐1990
- (61) 張羽新1988
- (62) 王佩環1986
- (63) 郭成康1987b
- (64) 袁森坡1988
- (65) 関樹東1994
- (66) 白洪希1997
- (67) 達力扎布2011
- (68) 宝日吉根1980、1981
- (69) 金元山1986

- (70) 湯代佳1996  
 (71) 巴根那2000  
 (72) 周喜峰2006、2010  
 (73) 敖拉2007  
 (74) 岑大利1991  
 (75) 劉路1995  
 (76) 杜家驥2003  
 (77) 札奇斯欽1987  
 (78) 李勤璞2000  
 (79) 劉小萌1994  
 (80) 閻崇年1998  
 (81) 達力扎布1998、2001、2003a、2003b

### ③八旗制・満洲人について

八旗制の概略的な考察は秦国経(1)、周遠廉(2)、馮季昌(3)がしている。王革生(4)は、八旗の旗色が定まったのは、八旗が編成されたとされる1615年ではなく、1635年までに定まったと主張した。また、八旗制が軍事勝利に貢献した側面についても考察している(5)。

李新達(6)は、八旗の兵数について考証し、八旗創設期は5～6万人、ヌルハチの晩年は9万人、ホンタイジ期は15万人であったと推計した。また、満洲八旗と漢軍八旗の創設年次についても考察している(7)。

八旗制はその創設の経緯に関する明確な史料がないため、創設期の状況について定説は存在しない。姜相順(8)は創設期の状況について考察している。孟昭信(9)は1615年以前に四旗が存在しており、各旗はヌルハチ、チュエン、ダイシャン、シウルガチが領旗していたと主張した。

徐凱(10)は、八旗制がどのように変化して皇帝権力を強化したのか、その過程について考察するとともに、漢人がどのように八旗に組み込まれたのか検討を加えた。趙明(11)は、八旗兵丁がどれくらいの経済的な負担を課せられていたのか考察した。また、既述した郭成康、李鴻彬による八旗制研究も参照する必要がある。

八旗制について重要な研究として、張佳生と王景沢の研究をあげたい。張佳生(12)は、女真諸部がニルへの編入により、どのように満洲人となっていったのか、①民族統合、②社会統合、③文化統合の三側面から考察した。王景沢は、八旗満洲、

八旗蒙古、八旗漢軍の形成過程について考察し、さらには八旗制がマンジュ国・清朝の政治、軍事においてどのような役割を果たしたのか考察した(13)。また、女真社会内部の変化と八旗制の形成についても論じている(14)。

必ずしも入関前だけではないが、劉小萌(15)が八旗制についての研究史をまとめている。

八旗漢軍については、戦前の1931年に浦廉一(16)が論文を出している。戦後には阿南惟敬(17)が、その成立過程について考察した。細谷良夫(18)は、八旗漢軍は軍事的に編成されたものであり、八旗満洲、八旗蒙古と同一に把握することはできないと指摘した。そして八旗漢軍が軍事、行政の両面を併せ持つ八旗の組織として確立するのは1637年の二旗編成以後であったと主張した。また、李英新(19)も八旗漢軍の制度と漢軍旗人について考察している。概括的な研究としては趙綺娜(20)、陳佳華(21)、謝景芳(22)、李燕光(23)があげられる。成立時期については劉家駒(24)、謝景芳(25)、佟永功(26)が考察している。孫静(27)は漢軍旗人と満洲旗人の差異について、滕紹箴(28)は八旗漢軍のニルの特徴について考察している。

八旗蒙古の成立については田中宏巳(28)、阿南惟敬(29)が考察を加えている。梅山直也(30)は制度史の観点からだけでなく、より視野を広げて、八旗蒙古の成立を清朝によるモンゴル統治とのかかわりから考察している。中国での研究は成立事情について考察した研究が多い。王鍾翰(31)が八旗蒙古を題材にした論文を発表した後、鄭玉英(32)、郭成康(33)、陳生璽(34)、傅克東(35)、姚念慈(36)が考察を加えている。趙琦(37)はこれまでの研究成果をふまえて、八旗蒙古の成立過程について、より具体的な考察をおこなった。

朝鮮人により編成された八旗については、文鐘哲(38)、徐凱(39)による研究がある。

八旗を構成したニル、佐領についての研究もすすめられている。日本では承志(40)が、すべての旗人はニルに編成され、特定の家系が世襲することになったため、世襲、継承をめぐる訴訟がおこっていたことに着目した。清朝は何を根拠にニルの世襲をみとめていたのか検討し、ニルの歴史、構造について考察した。

増井寛也(41)は、ニルは均質的なものでも、制

度的に厳密に規定された存在でもなく、いくつかの類別があったと指摘した。しかし、漢文・満文史料ともにそれらに対する一定の名称は確立していなかったため、ニルの実態把握は難しいが、各種の史料を検討した結果、ニルには国家的管轄下のものと、王公私有のものに分けられると主張した。

中国では陳佳華(42)が1982年に佐領の歴史、種類、構造、機能について要領よく叙述した論文を発表した。ニルの特徴については陳佳華(43)、陳文石(44)、王景沢(45)が考察している。形成、編成時期については、劉小萌(46)、関克笑(47)、任玉雪(48)が考察している。種類、数については、郭成康(49)、陳佳華(50)が考察している。滕紹箴(51)は、ヌルハチ期のニルについて考察している。

ニルには奴隷が配属されており、その状況、特質については田中克己(52)、石橋秀雄(53)が考察している。汪茂和(54)は遼東占領以前の「阿哈」の状況について考察し、「阿哈」は社会生産の基本的担い手ではなく、貴族層の生活に従事する存在だと指摘した。そして、「阿哈」と主人の関係は「封建的主僕関係」であったと主張した。

満洲人とはどのような人々で、いつ形成されたかについては見解が分かれている。八旗制に編入された人を満洲人と称することもできる。では、いつの時点から八旗に編入された人を満洲人と呼ぶのかは議論になっている(55)。満洲人の形成、発展過程については、関克笑(56)、薛虹(57)、張丹卉(58)、朱誠如(59)が考察している。これらの論文に通底しているのは、女真と満洲人は同じではなく、女真を中心として漢人、朝鮮人、モンゴル人などが融合し、その結果として満洲人は誕生したという見解である。

満洲社会の発展段階に関する議論は、90年代以降も継続しておこなわれた。王佩環(60)は、1990年に入関前の社会経済状況について考察した。王冬芳(61)は、満洲社会は氏族制社会から抜け出し、封建制に移行する過渡期であったと指摘した。姜相順(62)は、これまでの考え方は農業を主要基盤とした社会は封建制を生み出すが、狩猟・採取を主要基盤とした社会は封建的生産関係を生み出さないという考え方であった。しかしこれは一面的な見解であり、女真社会は農業を主要基盤にはし

ていなかったが、封建制の形成過程にあったとし、ヌルハチ政権は奴隷制ではなく封建制だと主張した。

こうした社会発展段階についての議論は、しだいに影をひそめ、満洲人の生活様式の変化や民族意識から満洲社会の状況を考察する研究が出されるようになった。馬渉湘(63)は、生産力の上昇、漢人文化の流入により、満洲人の生活様式は変化していたことを主張した。王素香(64)も満洲人の生活変化について論じている。張佳生(65)は、自分たちを満洲人だとみなす意識が、どのように形成されたのかを考察した。杜成安(66)は、ヌルハチ政権の官吏制度の形成過程との関係から満洲人の統合状態について考察した。張佳生(67)は、満洲人の漢化がよく指摘されるが、その反対に漢人が満洲化し、満洲社会と融合していた側面について指摘した。

この他に、周喜峰(68)は黒龍江方面での満洲人の形成について、韓世明(69)は入関前の満洲人の社会組織について、張徳玉(70)は満洲人の勃興状況について考察している。また、佟佳氏に関する研究が傅波(71)らによりおこなわれている。

- (1) 秦国経1981
- (2) 周遠廉1982a
- (3) 馮季昌1991
- (4) 王革生1980
- (5) 王革生2000
- (6) 李新達1982a
- (7) 李新達1982b
- (8) 姜相順1986
- (9) 孟昭信1992
- (10) 徐凱1989、2004
- (11) 趙明1994
- (12) 張佳生2008
- (13) 王景沢2002
- (14) 王景沢1999
- (15) 劉小萌2010
- (16) 浦廉一1931
- (17) 阿南惟敬1966a
- (18) 細谷良夫1994
- (19) 李英新2005
- (20) 趙綺娜1973
- (21) 陳佳華1981b

- (22) 謝景芳1986  
 (23) 李燕光1992  
 (24) 劉家駒1978  
 (25) 謝景芳1987、1991  
 (26) 佟永功2009a  
 (27) 孫靜2006  
 (28) 滕紹箴2007  
 (28) 田中宏巳1971  
 (29) 阿南惟敬1965  
 (30) 梅山直也2006  
 (31) 王鍾翰1957c  
 (32) 鄭玉英1983  
 (33) 郭成康1986  
 (34) 陳生璽1988b  
 (35) 傅克東1988  
 (36) 姚念慈1995  
 (37) 趙琦1997a、1997b  
 (38) 文鐘哲1997  
 (39) 徐凱1998、1999、2000  
 (40) 承志2006  
 (41) 増井寛也2008、2009  
 (42) 陳佳華1982a  
 (43) 陳佳華1982b  
 (44) 陳文石1991a  
 (45) 王景沢1998a  
 (46) 劉小萌1990a  
 (47) 関克笑1997b  
 (48) 任玉雪2004  
 (49) 郭成康1985b、1987a  
 (50) 陳佳華1984a  
 (51) 滕紹箴2001  
 (52) 田中克己1956  
 (53) 石橋秀雄1968、1984  
 (54) 汪茂和1982  
 (55) 陳力2011  
 (56) 関克笑1991  
 (57) 薛虹1994  
 (58) 張丹卉2004a  
 (59) 朱誠如2002  
 (60) 王佩環1990  
 (61) 王冬芳1991a、1991b  
 (62) 姜相順1994  
 (63) 馬涉湘1991

- (64) 王素香2006  
 (65) 張佳生2008a  
 (66) 杜成安2003  
 (67) 張佳生2008c  
 (68) 周喜峰2009  
 (69) 韓世明2002  
 (70) 張徳玉2001  
 (71) 傅波主編2004

#### ④清朝に帰順した漢人と明朝側で活躍した人物

マンジュ国・清朝が勢力拡大をするにあたっては、帰順した漢人の力も大きかった。以下では帰順した漢人に関する研究をとりあげる。ヌルハチの顧問をつとめた龔正陸については和田清(1)、董万侖(2)の研究がある。はやくに帰順した漢人のなかでは、李永芳については杉山清彦(3)、趙広慶(4)、王平魯(5)、杜家驥(6)の研究がある。范文程については遠藤隆俊(7)、金成基(8)、王景沢(9)の研究がある。佟養性については王革生(10)、侯寿昌(11)、辺佐卿(12)、王景沢(13)、佟永功(14)の研究がある。侯寿昌は佟氏一族は何者であったのか考察している(15)。

開原出身の知識人くずれであった劉興祚は、一度はヌルハチに帰順したが、その後離脱してホンタイジと戦い、1630年に戦死した。その特異な経歴が注目を集め、研究成果も多く、高志超(16)は著作をまとめている。また田中克己(17)、孟森(18)、姜守鵬(19)、王佩環(20)、郭成康(21)、黄一農(22)らの研究がある。

ホンタイジ期に帰順した人物のなかでも洪承畴についての研究が多く、李光涛(23)、李新達(24)、李鴻彬(25)、尹徳文(26)、王鍾翰(27)、陳生璽(28)、王思治(29)、楊清江(30)、陳梧桐(31)が論文をまとめている。著作としては蘇双碧(32)、楊海英(33)の研究がある。また、孔有徳については、神田信夫(34)が「内国史院档」の「天聰七年档」を使い、帰順した時の状況について考察している。尚可喜については細谷良夫2007、薛瑞録(35)、李成燕(36)、柳海松(37)が考察している。祖大寿については李洵(38)が検討している。

謝景芳(39)は、ホンタイジ期に帰順した孔有徳、耿仲明、尚可喜、沈志祥がどのように領旗したのか考察した。葉高樹(40)は、清朝に帰順した明軍

の将兵について考察を加えている。張玉興(41)は明清動乱期の人物評価をどう決めるのか論じている。

以下では明朝側で活躍した人物についてとりあげている研究について見てみたい。

李成梁は遼東で活躍した明朝側の人物として著名である。その活動については既述した和田正広の研究が詳細に分析している。この他に、日本では園田一亀(42)、和田清(43)が考察しており、和田清は「ヌルハチは李成梁の保護を受けて興隆した」という見解は憶測であったとしている。中国での研究には孫文良(44)、肖瑤(45)、陳澧(46)がある。

高淮は鉅税徴収のため1599年に遼東へ赴任し、1608年に去るまで過酷な徴税をおこない、遼東の社会的混乱を助長させた。高淮の遼東での活動については、孫文良(47)、周遠廉(48)、南炳文(49)、趙連穩(50)が考察している。

熊廷弼はヌルハチの勢力拡大に抵抗していたが、同僚との不和から解職され、魏忠賢による排撃を受けて処刑された。熊廷弼については、李光濤(51)と喻蓉蓉(52)の研究書が刊行されている。論文では、韓道誠(53)、戴鴻義(54)、孫興常(55)、張彩雲(56)の研究がある。なかでも孫興常の研究は優れている。佟十年は熊廷弼の補佐として起用されたが、後金と通じているという誣告を受けて失脚してしまい、さらには獄死した。その経緯については、王景沢(57)が考察している。

孫承宗は袁崇煥の上司として広寧失陥(1622年)以後に指揮をとり、「以遼人守遼土、以遼土養遼人」を主張してヌルハチに抵抗した。寧遠城を完成させ防衛体制を整えたが、1625年に故郷の高陽へ帰った。その後、1638年に高陽は清朝軍の攻撃を受け、その際に死去した。孫承宗については、劉伯涵(58)、陳作榮(59)、姜守鵬(60)、閻光亮(61)、余三樂(62)が考察している。

毛文龍は鴨緑江方面でヌルハチと戦っていたが独断専行的な行為が多く、1629年に袁崇煥により殺された。毛文龍は明朝、朝鮮、ヌルハチの間で巧妙に立ち廻り、自己の勢力を保持するという注目すべき活動をしていたので研究も多い。戦前では田川孝三(63)が朝鮮との関係から考察している。神田信夫(64)は1628～29年にかけて、毛文龍がホ

ンタイジとやりとりした書簡を題材にして、両者の関係について分析した。松浦章(65)は毛文龍が拠点にした椴島の状況について考察した。中国では李光濤(66)、孟昭信(67)、陳生璽(68)、姜守鵬(69)、許振興(70)、尹鈞公(71)、魏剛(72)、趙亮(73)らによる研究がある。

袁崇煥は寧遠城の戦いでヌルハチを撃退したことで著名な人物である。その後、ホンタイジがしかけた策略に崇禎帝が陥ったことから、袁崇煥は謀反の考えがあると疑われ処刑された。袁崇煥についての研究は多い。その事績については神田信夫(74)、李光濤(75)、孫小雲(76)、王鍾翰(77)、陳澧(78)、馮佐哲(79)、李鴻彬(80)、閻崇年(81)、李宝臣(82)羅炳錦(83)が検討している。陳安麗(84)は、袁崇煥とモンゴルの提携について考察した。袁崇煥について精力的に研究を進めている閻崇年は論文集、資料集、伝記を刊行している(85)。袁崇煥に関する論文集も、これまでに二冊出されている(86)。

姜守鵬(87)は熊廷弼、孫承宗、袁崇煥の比較をおこない、葉高樹(88)は李成梁、毛文龍、祖大寿の比較研究をおこなっている。

- (1) 和田清1952
- (2) 董万倫1995
- (3) 杉山清彦2009
- (4) 趙広慶1994a
- (5) 王平魯1994
- (6) 杜家驥2005
- (7) 遠藤隆俊1995
- (8) 金成基1982
- (9) 王景沢1993
- (10) 王革生1985b
- (11) 侯寿昌1986
- (12) 辺佐卿1994a
- (13) 王景沢2009
- (14) 佟永功2009b
- (15) 侯寿昌1988
- (16) 高志超2008、2010
- (17) 田中克己1958a
- (18) 孟森1980
- (19) 姜守鵬1984b、1987
- (20) 王佩環1987
- (21) 郭成康1994

- (22) 黄一農2002  
 (23) 李光涛1948a、1956  
 (24) 李新達1984、1986、1992  
 (25) 李鴻彬1984b  
 (26) 尹徳文1986  
 (27) 王鍾翰1986  
 (28) 陳生璽1988a  
 (29) 王思治1996  
 (30) 楊清江1996  
 (31) 陳梧桐1996  
 (32) 蘇双碧1996  
 (33) 楊海英2006  
 (34) 神田信夫1997  
 (35) 薛瑞録1987  
 (36) 李成燕2002  
 (37) 柳海松2005  
 (38) 李洵1983、2004  
 (39) 謝景芳1996  
 (40) 葉高樹1993  
 (41) 張玉興1998  
 (42) 園田一亀1938  
 (43) 和田清1938  
 (44) 孫文良1991a  
 (45) 肖瑤2006、2010  
 (46) 陳澆2009  
 (47) 孫文良1982a  
 (48) 周遠廉1983  
 (49) 南炳文1980  
 (50) 趙連穩1991  
 (51) 李光涛1976  
 (52) 喻蓉蓉2010  
 (53) 韓道誠1968  
 (54) 戴鴻義1989  
 (55) 孫與常1994  
 (56) 張彩雲2009  
 (57) 王景沢2011  
 (58) 劉伯涵1985  
 (59) 陳作栄1988  
 (60) 姜守鵬1988  
 (61) 閻光亮1988、1995  
 (62) 余三楽1989  
 (63) 田川孝三1932  
 (64) 神田信夫1966  
 (65) 松浦章2007  
 (66) 李光涛1948c、1968  
 (67) 孟昭信1981a、2007a、2007b、2008  
 (68) 陳生璽1983、1993、1995  
 (69) 姜守鵬1984a、1989  
 (70) 許振興1984  
 (71) 尹韵公1990  
 (72) 魏剛1999b  
 (73) 趙亮2007  
 (74) 神田信夫1962  
 (75) 李光涛1947b  
 (76) 孫小雲1984  
 (77) 王鍾翰1985  
 (78) 陳澆1989  
 (79) 馮佐哲1990  
 (80) 李鴻彬1990  
 (81) 閻崇年1993、1995c  
 (82) 李宝臣2008  
 (83) 羅炳錦1993  
 (84) 陳安麗1990  
 (85) 閻崇年1984、1994、2005  
 (86) 広西桂苑書林叢書編輯委員会1984、羅志歆  
 2005  
 (87) 姜守鵬1992  
 (88) 葉高樹2009
- ⑤産業政策・民族政策・軍事史**  
 商業の状況については李興華(1)が、韓行方(2)は遼東占領までおこなわれた明側による山東から遼東への海運について考察している。魏鑒勛(3)は、ヌルハチ期・ホンタイジ期の農業・商業政策について検討した。張丹卉(4)は遼東の城鎮について考察し、それらの多くはマンジュ国・清朝により破壊されたり、住民の移動により衰退してしまい、再び城鎮が回復するのは康熙中頃以降であったと主張した。  
 農業については土地制度関係の論文が多い。金成基(5)は旗地制度について、魏千志(6)は「拖克索」の性質について、趙広慶(7)はヌルハチ期の農業状況について考察した。徐恒晋(8)は農業生産について検討を加え、遼東占領後に農奴制が拡大を始め、入関後に封建的農奴制が確立したと主張した。  
 ヌルハチが遼東占領後に実施した「計丁授田」

の内容にはいくつかの解釈が存在し、とくに授田対象者がどの範囲の人々であったのかについて議論されている。「計丁授田」については、郭成康(9)、李景蘭(10)、王鍾翰(11)、趙令志(12)が考察している。諸見解の相違については趙令志(13)による整理を参照されたい。

清朝の勢力拡大は周辺民族に大きな影響をおよぼした。概括的にマンジュ国・清朝の民族政策を考察した研究には、李治亭(14)、楊学琛(15)、郭成康(16)、孫文良(17)、余梓東(18)、馬玉良(19)がある。八旗制における民族関係については、陳佳華(20)、魯渝生(21)が検討している。王景沢(22)はホンタイジの民族政策を、葉高樹(23)は漢人官僚の統御について考察している。Gertraude Rothは遼東での満漢関係について論じている(24)。

サルフの戦いから入関までの戦争史については、孫文良(25)による概説書がある。サルフの戦いについては、陸戦史研究普及会編(26)、姜相順(27)、張玉興(28)、馬玉良(29)、張徳玉(30)、黄仁宇(31)、関克笑(32)、王叢安(33)が検討している。「大凌河の戦い」については楠木賢道(34)が、「松錦の戦い」については李光涛(35)、劉建新(36)が考察している。郭成康(37)、魏剛(38)、王偉(39)、江寧(40)も明清間の戦闘を題材にした論文をまとめている。王天有(41)は遼東での戦闘が明朝に与えた影響について、張玉興(42)は和議の動向について考察している。王思治(43)は、ホンタイジ期の対明作戦について考察している。既述した閻崇年、李鴻彬、孫文良も戦闘についての論文を発表している。

明清戦争の際には大砲が軍事的に重要な役割を果たした。明朝の袁崇煥はポルトガル製の砲を使って、ヌルハチを撃退した。その後、ホンタイジ期に帰順した孔有徳らにより優れた大砲がもたらされ、清軍の攻撃力を強力なものへとした。この時期の大砲についての研究は多く、張小青(44)、牟潤孫(45)、韋慶遠(46)、張敬媛(47)、解立紅(48)、李鴻彬(49)、黄一農(50)、石康(51)、馬楚堅(52)、田中宏巳(53)が考察している。

- (1) 李興華2010
- (2) 韓行方1992
- (3) 魏鑒勛1984
- (4) 張丹卉2004b
- (5) 金成基1979

- (6) 魏千志1982
- (7) 趙広慶1994b
- (8) 徐恒晋1981
- (9) 郭成康1982c
- (10) 李景蘭1984
- (11) 王鍾翰1986
- (12) 趙令志1997
- (13) 趙令志2001、32～33頁
- (14) 李治亭1981
- (15) 楊学琛1981、1988
- (16) 郭成康1983
- (17) 孫文良1991
- (18) 余梓東2002、2009
- (19) 馬玉良2005
- (20) 陳佳華1980
- (21) 魯渝生1998
- (22) 王景沢2003b
- (23) 葉高樹1995
- (24) Gertraude Roth1979
- (25) 孫文良1986
- (26) 陸戦史研究普及会編1967
- (27) 姜相順1979
- (28) 張玉興1981
- (29) 馬玉良1986
- (30) 張徳玉1989
- (31) 黄仁宇1991
- (32) 関克笑1998
- (33) 王叢安2001
- (34) 楠木賢道2002
- (35) 李光涛1971
- (36) 劉建新1986
- (37) 郭成康1982b
- (38) 魏剛1999a、2004
- (39) 王偉2009
- (40) 江寧1989
- (41) 王天有1983
- (42) 張玉興1990
- (43) 王思治1988
- (44) 張小青1986
- (45) 牟潤孫1987
- (46) 韋慶遠1990
- (47) 張敬媛1993
- (48) 解立紅1994

- (49) 李鴻彬1997c  
(50) 黄一農1996、2004、2008  
(51) 石康2011  
(52) 馬楚堅1993  
(53) 田中宏巳1974、1974-75

## ⑥開国説話・史料について

清朝の開国説話は『満洲実録』の巻頭に記述されている。長白山の東方にそびえるブクリ山のふもとにブルフリという湖があり、そこで三人の天女が水浴びをしていた。衣を着ようとした天女が、衣の上に置かれた朱い木の実を食べたところ身籠り、ヌルハチの先祖にあたるブクリ＝ヨンションを生んだという。そして、ヌルハチに至る世系についての記述が続く。

この開国説話とそれに続くヌルハチの世系について、最初に考証を加えたのは内藤湖南(1)であった。内藤湖南は開国説話の内容は高句麗に発する扶余系説話に属すること、ヌルハチの世系は建州左衛の世系にあたることを1912年の論文で指摘した。その後、稲葉岩吉(2)、孟森(3)がこの問題を取り上げ、各種の史料と比較検討して、建州左衛につらなる人物、地名の考証をおこなった。戦後になり三田村泰助(4)が内藤湖南の見解を受け止めて、開国説話の内容、清朝の始祖の性格、世系の問題点について考察した。この論文により、開国説話の分析はほぼ尽きてしまい、さらなる考察は新史料の発見を待たなければならない状況になった。

そうしたなか松村潤(5)は档案を分析して、開国説話の由来について新見解を主張した。松村潤は「満文原档」に収録されている「天聰九年档」を検討した結果、「満文老档」には収録されていない記事があり、そのなかに開国説話と同じ内容の記述があることを発見した。その記述はホンタイジが1635年5月に東海フルハ部を攻略した後、連れてきた人がフルハ部の始祖伝説について語った内容であり、「満洲実録」巻頭の開国説話と同じであった。つまり清朝の開国説話は、本来はフルハ部のものであったという新見解を主張した。

次いで、崇徳年間に編纂された「太祖太后実録」(現存せず)の草稿の一つと考えられる満文档案が、「内国史院档」(中国第一歴史档案館所蔵)のなかに

あることを発見し、その分析に取り組んだ。この満文档案の最初には「満洲実録」巻頭と同様の開国説話が記述されており、ブクリ山の麓にある池で三人の天女が水浴びをした後、一人が身ごもったことについて記述している。しかし長白山の語句はなく、ブクリ山と長白山とを結びつけた記述はないことを松村潤は発見した。つまり、そもそもの開国説話には、長白山を満洲人の発祥地とする内容はなかったことを明らかにしたのである(6)。

以上の研究により、開国説話は当初から「満洲実録」巻頭に記述された内容ではなく、マンジュ国・清朝が勢力拡大をするなかで、さまざまな要素が盛り込まれていったことが明らかになった。清朝の開国説話は、高句麗に発する扶余系説話を基礎にして、征服した女真の説話を取り入れ、正統性の根拠として聖なる山である長白山との関係性を持ち出すという複雑な経過のなかで成立したことを、今日の研究は明らかにしている(7)。

以下では史料の状況について述べてみたい。今西春秋(8)は基本史料である「清朝実録」の編纂過程について考察した。さらに「清朝実録」は漢文だけでなく満文で書かれたものもあるので、両者の比較検討もおこなった(9)。三田村泰助(10)は「満文太祖老档」と「太祖実録」の関係性について検討し、「太祖実録」は「満文太祖老档」をもとに編纂されていることを明らかにした。

「太祖実録」は順治、康熙、雍正、乾隆と度重なる改修を経ているので、いつ、どのような改修がおこなわれたのか史料批判が不可欠である。松村潤(11)は、「太祖実録」の改修過程について考察している。また松村潤『明清史論考』第Ⅱ部三「清初の史料をめぐる」に収録されている論文は、入関前の清朝の史料を理解するうえで必読である。中国において「太祖実録」を分析した研究には、薛虹(12)、喬治忠(13)、徐丹俚(14)がある。

満洲語で書かれた「満文老档」はマンジュ国・清朝の動向を記述した貴重な史料である。残念ながら1607年より以前について現存していない。「満文老档」の日本語訳は、1955年から1963年にかけて刊行された。中国では関孝廉(15)、徐丹俚(16)、劉厚生(17)が分析している。1960年代に台湾において「満文老档」のオリジナルテキストである「満

文原档」の存在が確認された。「満文老档」は「満文原档」を書き改めたり、省略して編纂されたことが明らかになり、「満文老档」の利用には「満文原档」の確認が必要となった(18)。「満文老档」と「満文原档」の記述を比較して、どのように「満文老档」の記述が成立したのかについての研究がすすめられている(19)。

「清朝実録」、「満文老档」、「満文原档」と、より原本に遡っての史料批判が現在では可能となった。そうした一方で、新たな档案の発掘もおこなわれている。石橋崇雄(20)は中国第一歴史档案館所蔵の満文档案を発掘して、その翻訳、分析をしている。ホンタイジの即位状況を記述した「丙子年四月<秘録>登ハン大位档」や「先ゲンギェン＝ハン賢行典例」の調査をおこない、新たな史料的展望を開こうとしている。

加藤直人(21)は、中国第一歴史档案館所蔵の「逃人档」の考察がすすめている。「逃人档」は後金から他所へ逃亡した人、その反対に他所から後金に逃亡してきた人々に関する記録であり、1626年から1630年にかけての文書が現存する。加藤直人により紹介、翻訳がされている。中国語訳は関孝廉によりおこなわれている(22)。

刊行された档案としては『盛京刑部原档』(23)、『天聰九年档』(24)、『崇徳三年満文档案訳編』(25)がある。また「内国史院档」の中国語訳、日本語訳が刊行されている(26)。李保文(27)は、中国歴史第一档案館所蔵のモンゴル語档案の紹介、中国語訳をしている。中国歴史第一档案館所蔵の史料の一部は、雑誌『歴史档案』に掲載されている(28)。

劉小萌(29)は、マンジュ国・清朝関係の史料について整理、解説をしている。史料を読むにあたっては公文書制度の知識が必要だが、ホンタイジ期については喬治忠(30)が参考になる。

- (1) 内藤湖南1970
- (2) 稲葉岩吉1931
- (3) 孟森1932
- (4) 三田村泰助1951
- (5) 松村潤1972b
- (6) 松村潤1998、2001
- (7) 中国での研究には董万侖1992、2002がある。
- (8) 今西春秋1935c、1938
- (9) 今西春秋1967

- (10) 三田村泰助 1950、1957a、1957b、1958、1959、1962a
- (11) 松村潤2001
- (12) 薛虹1988
- (13) 喬治忠1992
- (14) 徐丹俚1992
- (15) 関孝廉1988
- (16) 徐丹俚1993
- (17) 劉厚生1993、1999
- (18) 神田信夫1979
- (19) 細谷良夫1991
- (20) 石橋崇雄1994a、1995、1999、2000
- (21) 加藤直人1994、2007
- (22) 関孝廉1990
- (23) 中国人民大学清史研究所1985。孟昭信1989も参照。
- (24) 関嘉祿1987。佟永功2009も参照。
- (25) 季永梅1988。周遠廉1982も参照。
- (26) 中国第一歴史档案館1989。東洋文庫2003。東洋文庫2009
- (27) 李保文2000
- (28) 中国歴史第一档案館1981a、1981b、1982a、1982b、1985、2000
- (29) 劉小萌1998
- (30) 喬治忠2003

## おわりに

ヌルハチの勃興から入関までのマンチュリア史に関わる先行研究を整理し、予想以上に多くの研究が出されていることを確認した。今後はこれらの研究成果を統合して、より豊かなマンチュリア史像の構築をおこないたい。その際、女真が持っていたツングース系民族としての本来的性格、遼東に暮らした漢人の影響、鴨緑江の対岸に暮らした朝鮮人の影響、北西に暮らしたモンゴル人の影響という四者の要因に着目して、新たな歴史像を描きたいと考えている。

## 参考文献 中国語

## 晏路

1988 「滿族研究論著編目」『滿族研究』2、3、4  
pp. 91-96、pp. 92-96、pp. 88-93, 96

## 尹韵公

1990 「袁崇煥誅毛文龍案考」『社会科学戰線』1  
pp. 225-233

## 章慶遠

1990 「清王朝的締建与紅夷大炮的轟鳴」『中国文化』  
3 pp. 164-173

## 尹德文

1986 「關於洪承疇降清的幾個問題」『東北地方史研  
究』3 pp. 58-60

## 烏雲達賚

1987 「論明末清軍对索倫部战争的起因及其後果」  
『內蒙古社会科学』4 pp. 74-78

## 閻光亮

1988 「孫承宗与遼東防務」『遼寧教育学院學報』4  
pp. 22-24

1995 「論孫承宗“以遼人守遼土、以遼土養遼人”  
的防務策略」『遼寧教育学院學報』4  
pp. 39-41

## 袁森坡

1988 「論皇太極統一察哈爾的鬭爭」『清史研究集』  
6 pp. 38-61

## 閻崇年

1977 「論努爾哈赤」『中央民族學院學報』4  
pp. 61-70

→『燕步集』pp. 1-16

1978 「論雅克薩之戰」『北京師範大學學報』5  
pp. 73-79

→『燕步集』pp. 253-270

1983a 「努爾哈赤入京進貢考」『清史研究通訊』2  
pp. 2-5

→『燕步集』pp. 27-32

1983b 「努爾哈赤建立後金考」『社会科学輯刊』3  
pp. 103-106

→『燕步集』pp. 17-26

1984 「清入關前滿洲的社会經濟形態」『社会科学輯  
刊』4 pp. 87-97

→『燕步集』pp. 229-252

1989 「清太祖肇紀条件与歷史功過」『故宮博物院院  
刊』4 pp. 17-24

1993 「袁崇煥固守寧遠之揚摧」羅炳錦、劉健明編  
『明末清初華南地区歷史人物功業研討會論文集』  
香港中文大學歷史學系 pp. 1-10

1995a 「論寧遠爭局」『故宮博物院院刊 建院七十  
周年紀念專刊』1995 pp. 100-115

→『滿學論集』pp. 110-145

1995b 「論覺華島之役」『清史研究』2 pp. 1-8

→『滿學論集』pp. 146-163

1995c 「袁崇煥死因解析」『歷史档案』4  
pp. 85-91, 106

1997 「遼西爭局兵略點評」『故宮博物院院刊』2  
pp. 1-11

→『滿學論集』pp. 88-109

1998 「滿洲初期文化滿蒙二元性解析」『故宮博物院  
院刊』1 pp. 34-39

→『滿學論集』pp. 383-396

2003 「論大凌河之戰」『清史研究』1 pp. 48-58

2004a 「清太祖斬子之謎」『紫禁城』4 pp. 83-87

2004b 「清太宗經略索倫弁」『歷史档案』2  
pp. 61-71

1983c 『努爾哈赤傳』北京出版社 338p

1984 『袁崇煥資料集錄』上下、廣西民族出版社  
270p、272p

1989 『燕步集』北京燕山出版社 423p

1994 『袁崇煥研究論集』文史哲出版社 344p

1999 『滿學論集』民族出版社 423p

2005 『袁崇煥傳』中華書局 303p

## 王偉

2009 「明清之際遼東軍事局面的變遷」『北華大學學  
報(社会科学版)』5 pp. 104-108

## 王禹良

2008 劉述昕「清朝前期關外三京的初步比較研究」  
『滿族研究』1 pp. 41-46

## 王艷春

2008 「李朝質子在盛京問題的研究」傅波主編『從  
興京到盛京—努爾哈齊永崛軌跡探源』遼寧民  
族出版社 pp. 246-267

## 王革生

1980 「清代八旗的旗幟」『社会科学輯刊』6  
pp. 101-106

1985a 「論努爾哈赤、皇太極“用間”」『東北地方  
史研究』4 pp. 8-14

1985b 「清朝開國功臣佟養性」『北方論叢』6

- pp. 34-37
- 2000「八旗与清初の軍事勝利」『北方文物』1  
pp. 77-80
- 王雁**
- 2009「明清戦争与瀋陽城の発展」『滿族研究』4  
pp. 51-55
- 王景沢**
- 1993「關於范文程の幾点考証」『西南師範大学学報  
(哲学社会科学版)』3 pp. 104-107
- 1997馬桂秋「“野人女真”与努爾哈赤の興起」『黒  
龍江民族叢刊』3 pp. 60-65
- 1998a「論早期滿洲牛泉」『東北師大学報(哲学社会  
科学版)』2 pp. 52-55
- 1998b「關於范文程の幾点考証」『西南師範大学学  
報(哲学社会科学版)』3 pp. 104-107
- 1999「關於穆昆与滿洲“前四旗”問題」『第七届明  
史國際學術討論會論文集』東北師範大学出版社  
pp. 129-133
- 2003a「明末の“遼人”与“遼軍”」『中国辺疆史  
地研究』1 pp. 26-32
- 2003b「試論清太宗皇太极对異民族的“恩養”政策」  
『社会科学戦線』2 pp. 112-116
- 2008「明末東北自然災害与女真族の崛起」『西南大  
学学報(社会科学版)』2008-4 pp. 48-53
- 2009楊華「佟養性及其家族与清朝開国」『滿族研究』  
2 pp. 25-30
- 2011「明末佟卜年之獄」『北方論叢』3 pp. 65-68
- 2002『清朝開国時期八旗研究 1583~1661』吉林  
文史出版社 325p
- 王鍾翰**
- 1956「滿族在努爾哈齊時代的社会經濟形態」『中国  
民族問題研究集刊』5 pp. 60-92  
→『清史雜考』pp. 1-39  
→中国人民大学清史研究所編『清史論文選集』  
1、中国人民大学出版社、1979 pp. 149-185  
→『王鍾翰清史論集』1 pp. 74-110
- 1957a「皇太極時代滿族向封建制的過渡」『清史雜  
考』人民出版社 pp. 40-98  
→中国人民大学清史研究所編『清史論文選集』  
1、中国人民大学出版社、1979 pp. 186-240  
→『王鍾翰清史論集』1 pp. 226-285
- 1957b「達斡爾人出於索倫部考」『清史雜考』人民  
出版社 pp. 99-116
- 『王鍾翰清史論集』3 pp. 1553-1570
- 1957c「清初八旗蒙古考」『清史雜考』人民出版社  
pp. 117-146  
→『王鍾翰清史論集』3 pp. 1506-1552
- 1985「論袁崇煥与皇太極」『社会科学戦線』1  
pp. 126-134  
→『袁崇煥研究論文集』廣西民族出版社、1984  
pp. 1-18  
→『王鍾翰清史論集』1 pp. 181-203
- 1986「滿文老档中計丁授田商榷」『民族史論叢』1  
pp. 39-51  
→『王鍾翰清史論集』1 pp. 588-608
- 2004「洪承疇的歷史功過問題」『王鍾翰清史論集』  
2 pp. 873-881
- 2004『王鍾翰清史論集』1~4、中華書局
- 王思治**
- 1984a「皇太極嗣位与諸大貝勒的矛盾」『歷史档案』  
1 pp. 79-84  
→『清史論稿』巴蜀書社、1987 pp. 80-93
- 1984b「皇太極研究中的幾個問題」『社会科学戦線』  
3 pp. 134-142
- 1988李鴻彬「論皇太極時期对明作戰戰略的演變」  
中国第一歷史档案館『明清档案与歷史研究』  
中華書局 pp. 342-361
- 1996「洪承疇降清評議」『清史研究』3 pp. 71-80
- 2005「立皇太極為君与汗位之爭」傅波主編『赫圖  
阿拉与滿族姓氏家譜研究』遼寧民族出版社  
pp. 99-112
- 王臻**
- 2002「明代女真族与朝鮮的辺貿考述」『延辺大学学  
報(社会科学版)』1 pp. 103-105
- 2006「薩爾滸战役前後之後金与明朝、朝鮮關係探  
析」『遼寧大学学報(哲学社会科学版)』5  
pp. 77-83
- 2008a「“丁卯之役”的交涉及戰後金鮮的矛盾衝突  
探析」『韓国研究論叢』18 pp. 355-369
- 2008b程志野「試論後金(清)与朝鮮開設互市辺貿的  
社会効果」『延辺大学学報(社会科学版)』5  
pp. 130-134
- 2009a「試析後金建立前東北亜地区的政治秩序」  
『社会科学戦線』10 pp. 136-138
- 2009b「“丙子之役”及戰後清鮮交涉的幾個問題」  
『韓国研究論叢』21 pp. 362-376

**王崇武**

1947「論明清薩爾滸之戰」『学原』1-6 pp. 17-27

**王素香**

2006「略論明末遼東滿族社会生活的變遷」『滿族研究』1 pp. 57-62

**王叢安**

2001「桓仁県境最大的古戰場—細說薩爾滸大戰的東綫之戰」『滿族研究』3 pp. 47-52

**王軼**

2004「後金定都瀋陽的原因及其影響」『社会科学輯刊』4 pp. 107-111

**王天有**

1983「略論明万曆、天啓年間的党争对遼東戰局的影響」『歷史教学』5 pp. 11-15

**王冬芳**

1991a「關於明末女真社会形態問題的研究」張志立編『東北亜歴史与文化』遼瀋書社出版 pp. 574-584

1991b「關於努爾哈赤時期女真社会性質問題新探」『社会科学輯刊』3 pp. 67-72

1992「努爾哈赤在統一女真、治理後金中的措施及其作用」『滿族研究』4 pp. 20-27

2010『明清史考異』北京燕山出版社 586p

**王佩環**

1986「皇太極与長寧寺—兼談其“懷柔蒙古”的政策」『北方文物』2 pp. 84-87

1987王愛軍「劉興祚兄弟事跡始末」『吉林師範大學學報(人文社会版)』2 pp. 36-42

1990「試論入關前滿族社会經濟及其生產力水平」『滿族研究文集』吉林文史出版社 pp. 175-188

**王平魯**

1994「李永芳史事述略」傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社 pp. 251-256

**汪茂和**

1982「早期滿族社会的阿哈身分問題」『南開學報』5 pp. 53-61

**溫淑萍**

2008「論努爾哈赤時期与朝鮮的外交關係」傅波主編『從興京到盛京—努爾哈爾赤崛起軌跡探源』遼寧民族出版社 pp. 268-279

**何溥澄**

1979「滿族入關前社会性質初探」『社会科学輯刊』3 pp. 112-124

1990「論皇太極的民族一体思想」『滿族研究』3 pp. 22-27

**解立紅**

1994「紅衣大炮与滿洲興衰」『滿学研究』2 pp. 102-118

**郭成康**

1981劉建新「清太宗時期的“新滿洲”問題」『歷史档案』4 pp. 102-107, 116

1982a李鴻彬「也談八旗旗纛」『社会科学輯刊』1 pp. 99-104

1982b劉建新「一六三七年明清皮島之戰」『歷史档案』3 pp. 84-89

1982c劉建新「努爾哈赤“計丁授田”論考實」『清史研究論集』2、1982 pp. 88-114

1982d劉建新「清入關前八旗的固山額真」『清史論叢』4、1982 pp. 203-215

1983「試析清王朝入關前对漢族的政策」『民族研究』3 pp. 15-22

1984「論早期滿族社会的首告問題」『歷史档案』2 pp. 83-90

1985a「清入關前对黑龍江地区的征服和有效統治」『黑河學刊』1 pp. 7-13

1985b「清初牛录的類別」『史學集刊』4 pp. 24-31

1986「清初蒙古八旗考積」『民族研究』3 pp. 51-58

1987a「清初牛录的數目」『清史研究通訊』1 pp. 31-35

1987b「皇太極对漠南蒙古的統治」『中央民族學院學報』5 pp. 3-9

1994成崇德「劉興祚論」『清史研究』2 pp. 20-36

1988張晉藩『清入關前国家法律制度史』遼寧人民出版社 599p

**閔克笑**

1991「試論滿族的發展变化(上、中、下)」『滿族研究』2、3、4 pp. 14-22, pp. 26-29, 78, pp. 21-28

1997a「滿族共同体孕育形成時期的討賞」『黑龍江民族叢刊』1 pp. 60-66

1997b「牛录、固山(旗)編建時間考」『滿族研究』3 pp. 53-59

1997c「滿族共同体孕育形成時期的討賞」『黑龍江民族叢刊』1 pp. 60-66

1998「薩爾滸之戰性質商榷」『黑龍江民族叢刊』2 pp. 74-78

**関嘉禄**

1987『天聰九年档』天津古籍出版社 266p

**韓行方**

1992王宇「明朝末期登萊餉遼海運述略」『遼寧師範大學學報(社會科學版)』4 pp. 85-88

**関孝廉**

1988「論『滿文老档』」中国第一歷史檔案館編『明清檔案與歷史研究』上、中華書局 pp. 160-181

1990「盛京滿文逃人档」『清代檔案史料叢編』14

**関樹東**

1994「皇太極對漠南蒙古的政策和措施」『滿族研究』4 pp. 19-23

**韓世明**

2002「清入關前滿族組織結構及相關問題研究」『史學集刊』1 pp. 77-83

**管東貴**

1968「滿族入關前的文化發展對他們後來漢化的影響」『中央研究院歷史語言研究所集刊』40上 pp. 255-279

1969「入關前滿族兵數與人口問題的探討」『中央研究院歷史語言研究所集刊』41-2 pp. 179-194

**韓道誠**

1968「熊廷弼之經略遼東」『明代辺防 明史論叢之六』學生書局 pp. 131-180

**季永梅**

1988劉景憲編『崇德三年滿文檔案』遼瀋書社 284p

**魏鑾勛**

1979王廷元「試論皇太極重用漢官的政策」『遼寧大學學報』4 pp. 46-51

1980「皇太極時期後金政權的性質」『社會科學輯刊』5 pp. 98-102

1982袁閏琨「試論清入關前的滿蒙關係」『北方論叢』5 pp. 23-28

1984袁閏琨「試論努爾哈赤、皇太極的經濟政策」『北方論叢』2 pp. 90-96

1987袁閏琨「試論皇太極的文化改革」『學習與探索』6 pp. 131-136

1995「清入關前軍功集團與知囊集團比較研究」『社會科學輯刊』5 pp. 110-117

**魏剛**

1999a「明與後金對旅順的爭奪」『遼寧師範大學學報(社會科學版)』2 pp. 86-88

1999b「毛文龍在遼東沿海地區的戰略得失」『大連大學學報』5 pp. 96-98

2004「明朝設鎮皮島的戰略特失」『黑龍江民族叢刊』2 pp. 65-68

**魏志江**

2007a潘清「關於“丁卯胡亂”與清鮮初期交涉的幾個問題」『學習與探索』1 pp. 228-231

2007b「試論17世紀初的中韓交涉與東北亞國際格局」『社會科學戰線』5 pp. 132-137

2008「論後金努爾哈齊政權與朝鮮王朝的交涉及其影響」『民族研究』2 pp. 56-62

**魏千志**

1982「“拖克索”淺論」『明清史國際學術討論會論文集』天津人民出版社 pp. 593-617

**許振興**

1984「論毛文龍的歷史地位」『社會科學輯刊』5 pp. 97-101

**姜守鵬**

1984a「毛文龍與皇太極的關係—『毛文龍書信』簡析」『史學集刊』1 pp. 22-29

1984b「劉興祚事迹補考」『東北師大學報(哲學社會科學版)』5 pp. 77-82

1986「遼西對峙時期的明清議和」『東北師大學報(哲學社會科學版)』6 pp. 47-53

1987「劉興治的歸明與叛明」『社會科學輯刊』3 pp. 56-62

1988「孫承宗抗清事略」『吉林大學社會科學學報』3 pp. 71-76

1989「明朝與後金的東江角逐」『蒲峪學刊(克山師專學報)』1 pp. 48-53

1992「熊廷弼、孫承宗、袁崇煥經遼研究」『東北師大學報(哲學社會科學版)』4 pp. 31-35

1995「遼東戰爭時期明朝與朝鮮關係的變化」刁書仁主編『中朝關係史研究論文集』吉林文史出版社 pp. 191-199

**姜相順**

1979「薩爾滸戰爭」『遼寧師範學報』6 pp. 37-42

1986「試解滿洲八旗創制之謎」『滿族研究』1 pp. 12-18

1994「有關滿族入關前社會性質的幾個問題」『滿族研究』1 pp. 20-26

**喬治忠**

1992「清太祖一朝實錄的纂修與重修」『南開學報』

- 6 pp. 41-50  
2003 「清太宗朝漢文檔案文獻考析」『中国史研究』  
1 pp.145-157

### 金元山

- 1986 戴鴻義 「試論努爾哈赤、皇太極与科爾沁部聯  
姻關係」『瀋陽師範學院學報(社会科学版)』1  
pp. 95-101

### 金承藝

- 1985 「薩爾滸戰前的遼東情況」『漢學研究』1  
pp. 1-20

### 金成基

- 1979a 「論皇太極」『中国史研究』4 pp. 18-34  
1979b 「清入關前八旗土地制度試探」『清史論叢』  
1 pp. 146-157  
1982 「范文程簡論」『歷史研究』5 pp. 155-166

### 吳一煥

- 2007 『海路・移民・遺民社会—以明清之際中朝交  
往為中心』天津古籍出版社 267p

### 古清堯

- 1994 「談博穆博果爾其人与清軍對索倫部的征討」  
『民族研究』6 pp. 76-85

### 黃一農

- 1996 「紅夷大炮与明清戰爭—以火炮測準技術之演  
變為例」『清華學報』26-1 pp. 31-70  
2002 「劉興治兄弟与明季東江海上防線的崩潰」  
『漢學研究』1 pp. 131-161  
2004 「紅夷大炮与皇太極創立的八旗漢軍」『歷史研  
究』4 pp. 74-105  
2008 「明末薩爾滸之役的潰敗与西洋大炮的引進」  
『中央研究院歷史語言研究所集刊』79-3  
pp. 377-415

### 高艷林

- 2006 「明代万曆時期中朝“中江關市”設罷之始末」  
『中国歷史文物』2 pp. 38-43

### 高慶仁

- 1991 「皇太極澄清吏治整飭陋習措施述略」『滿族研  
究』2 pp. 23-31  
1993 張德玉 「努爾哈赤起兵前史迹新探」『社会科学  
戰線』6 pp. 194-202  
→ 傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社、1994  
pp. 73-89  
1995 「試論皇太極的吏治管理」『遼寧大學學報』6  
pp. 62-66

- 2000 紀桂秀 「努爾哈赤与東哥格格」『滿族研究』2  
pp. 22-34

### 高志超

- 2008 「劉興祚在明清轉型期的重要作用」『遼寧師範  
大學學報(社会科学版)』3 pp. 125-128  
2009 「試論薩爾滸戰後朝鮮与後金的關係—以姜弘  
立為中心」『東北史地』2 pp. 49-52  
2010 『劉興祚事跡考 明清鼎革之際遼東漢人的政  
治取向』長江出版社 146p

### 黃彰健

- 1967a 「努爾哈赤所建國号考」『歷史語言研究所集  
刊』37下 pp. 421-448  
→ 存萃學社編『清史論叢』第一集、大東圖書公  
司、1977 pp. 16-43  
→ 『明清史研究叢稿』pp. 481-519  
1967b 「論張儒紳齋夷文至明年月並論努爾哈赤的七  
大恨及滿文老檔諱稱建國号」『歷史語言研究所集  
刊』37下 pp. 449-458  
→ 存萃學社編『清史論叢』第二集、大東圖書公  
司、1977 pp. 187-202  
→ 『明清史研究叢稿』pp. 520-531  
1967c 「滿洲國国号考察」『歷史語言研究所集刊』37  
下 pp. 459-474  
→ 存萃學社編『清史論叢』第一集、大東圖書公  
司、1977 pp. 1-15  
→ 『明清史研究叢稿』pp. 532-551  
1967d 「清太祖天命建元考」『歷史語言研究所集  
刊』37下 pp. 475-496  
→ 存萃學社編『清史論叢』第二集、大東圖書公  
司、1977 pp. 166-186  
→ 『明清史研究叢稿』pp. 552-575  
1967e 「論清太祖於稱汗後稱帝、清太宗即位時亦稱  
帝」『歷史語言研究所集刊』37下 pp. 497-504  
→ 『明清史研究叢稿』pp. 579-587  
1977 『明清史研究叢稿』台灣商務印書館 655p  
**廣西桂苑書林叢書編輯委員會編**  
1984 『袁崇煥研究論文集』廣西民族出版社 665p  
**侯壽昌**  
1986 「淺論佟養性」『歷史檔案』2 pp. 105-110  
1988 「遼東佟氏族屬旗籍考辨」中国第一歷史檔案  
館編『明清檔案与歷史研究』中華書局  
pp. 362-372

**黄仁宇**

1991 「1619年の遼東戦役」『明史研究論叢』5  
pp. 174-196

**江寧**

「論寧錦大捷」『清史研究通訊』1989-1 pp. 7-14

**敖拉**

「關於《旧滿洲档》載天命年間科爾沁部的幾件事」  
『蒙古史研究』9、2007 pp. 130-137

**札奇斯欽**

1987 「滿清開国時期蒙古兵力の支援」『東洋法史の  
探究 島田正郎博士頌寿紀念論集』汲古書院  
pp. 65-86

**謝肇華**

1988 「明末農民戦争与滿洲の崛起」『中央民族学院  
学報』5 pp. 3-9

2000 「關於漢文旧档《各項稿簿》」『文献』2  
pp. 268-278

**謝景芳**

1986 「清初八旗漢軍の地位及作用」『求是学刊』3  
pp. 84-90

→『明清興替史事論考』pp. 203-217

1987 「八旗漢軍の建立及其歴史作用」『社会科学輯  
刊』3 pp. 69-74

→『明清興替史事論考』pp. 191-202

1988 「論“己巳之變”与明清興替」『求是学刊』1  
pp. 91-96

→『明清興替史事論考』pp. 91-101

1990 「英雄与時代—後金政体演變論」『求是学刊』  
3 pp. 78-84

→『明清興替史事論考』pp. 157-170

1991 「八旗漢軍の名称及含義沿革考釈」『北方文物』  
3 pp. 84-88

→『明清興替史事論考』pp. 171-179

1995 「明末皇太極北擄中原人口考実」『中国史研究』  
3 pp. 94-100

→『明清興替史事論考』pp. 102-113

1996 「“三王”、統順公所部“隸旗”考弁」『北方  
論叢』6 pp. 44-48

→『明清興替史事論考』pp. 180-190

2000 「努爾哈赤政治思想及時代特征」『黑龍江民族  
叢刊』1 pp. 50-58

→『明清興替史事論考』pp. 136-156

2008 『明清興替史事論考』吉林人民出版社 364p

**朱誠如**

1982 「明末遼東“棄地”案考実」『遼寧師院学報』  
5 pp. 67-71

→『管窺集』pp. 27-32

1983 「滿族共同体的形成与民族融合問題研究」『遼  
寧師院学報』2 pp. 56-64

→「明代女真和漢族間的交往滲透与滿族共同体的  
形成」『歴史論叢』5、1985 pp. 224-250

→『管窺集』pp. 1-17

1985 「論努爾哈赤時期的滿漢一体化政策」『遼寧師  
範大学学報(社会科学版)』2 pp. 65-70

→『管窺集』pp. 52-59

1987 「皇太極处理滿漢民族關係的政策」『文史哲』  
2 pp. 23-25

→『管窺集』pp. 60-64

1999 「清入関前対遼東漢区統治探微」『明清論叢』  
1 pp. 192-201

→『管窺集』pp. 39-51

2002a 「滿族共同体的形成与民族融合問題研究」  
『管窺集 明清史散論』紫禁城出版社

pp. 1-17

2002b 「代善在兩次爭嗣中的作用評価」『管窺集 明  
清史散論』紫禁城出版社 pp. 65-76

2002 『管窺集 明清史散論』紫禁城出版社 348p

**周遠廉**

1979a 「從“諸申”身分的變化看入関前滿族的社会  
性質」『社会科学輯刊』1 pp. 115-126

1979b 「關於滿族從奴隸制向封建制過渡的問題」  
『社会科学輯刊』4 pp. 103-118

1979c 「關於16世紀40—80年代初建州女真和早期滿  
族的社会性質問題」『清史論叢』1

pp. 158-176

1980a 「入関前滿族的社会性質」『中央民族学院学  
報』1 pp. 16-26

1980b 「關於1587—1621年滿族的社会性質問題」『民  
族史論叢』吉林人民出版社 pp. 183-251

1980c 「後金八和碩貝“共治国制”論」『清史論叢』  
2 pp. 244-262

1981a 「簡評努爾哈赤」『歴史档案』1 pp. 83-90

1981b 「關於清初開国史の幾個問題」『歴史論叢』  
2 pp. 433-460

1982a 「關於八旗制度的幾個問題」『清史論叢』3  
pp. 140-154

1982b 「關於《滿文崇德三年檔》的幾個問題」『社会科学戰線』4 pp. 181-188

1983 「万曆後期的鉅稅之禍—明代遼東檔案研究之三」『歷史論叢』3 pp. 236-271

1986 「太子之廢—清初疑案之一」『社会科学輯刊』1 pp. 35-43

1981b 『清朝開國史研究』遼寧人民出版社 298p

1986 『清朝興起史』吉林文史出版社 439p

2004 『清太祖伝』人民出版社 636p

2006 『清朝興起史』廣西師範大學出版社 289p

### 周喜峰

2004 「論努爾哈赤、皇太極統一黑龍江地區各民族的策略」『求是學刊』4 pp. 111-116

2006 「論科爾沁蒙古對滿族形成的影響」『求是學刊』3 pp. 133-138

2008 「明代末期黑龍江地區土著民族探析」『東北史地』5 pp. 77-82

2009 「黑龍江流域各族對滿族形成的影響」『滿語研究』1 pp. 116-121

2010 「論清入關前對科爾沁蒙古的統一與管理」『哈爾濱工業大學學報(社会科学版)』5 pp. 43-47

2007 『清朝前期黑龍江民族研究』中國社會科學出版社 366p

### 肖瑤

2001 「明清之際中朝經貿關係述論」李德山編『中國東北民族與疆域研究』時代文藝出版社 pp. 289-301

2006 「李成梁與戚繼光」『史學月刊』11 pp. 121-124

2007a 「從晚明遼東民族格局看“多元一體”理論」『大連民族學院學報』4 pp. 7-8, 11

2007b 「論晚明遼東政局的嬗變及其影響」『東北史地』2 pp. 74-77

2010 王蕙存「李成梁家世源流考」『東北史地』1 pp. 38-46

### 徐凱

1989 「清代八旗制度的變革與皇權集中」『北京大學學報(哲學社会科学版)』5 pp. 89-99

1994 「論“丁卯虜亂”與“丙子胡亂”」『當代韓國』3 pp. 37-42

→『韓國學論文集』3、1994 pp. 45-54

1998 「朝鮮佐領考」『韓國學論文集』7 pp. 313-319

1989 「滿洲八旗中高麗士大夫家族」『明清論叢』1

pp. 338-348

2000 「八旗滿洲旗分佐領內高麗姓氏」『故宮博物院院刊』5 pp. 62-73

2004 「尼堪姓氏與八旗滿洲旗分佐領」『中國史研究』1 pp. 141-157

### 徐恒晉

1981 「清初田庄性質初探」『民族研究』4 pp. 37-45

### 徐丹儂

1992 「“努爾哈赤實錄”考源」『滿學研究』1 pp. 152-171

1993 「《舊滿洲檔》冊劃史料價值初探」『北京社会科学』1 pp. 124-131

1995 「《清太祖皇帝實錄》康熙重修本弁証」『北京社会科学』1 pp. 86, 102-108

### 沈一民

2003 「皇太極的漢族文人政策評述」『黑龍江民族叢刊』5 pp. 63-66

2006 「啓心郎與清初政治」『史學月刊』6 pp. 31-36

2007 「入關前清(後金)南略次數考」『滿語研究』1 pp. 78-83

2011 「後金天聰三年考試述論」『東北史地』5 pp. 73-75

### 秦國經

1981 「清代的八旗制度」『歷史教學』4 pp. 13-17

### 岑大利

1991 「努爾哈赤家族與女真各部及漠南蒙古的聯姻」『清史論叢』8 pp. 226-239

2005 「試論代善」傅波主編『赫圖阿拉與滿族姓氏家譜研究』遼寧民族出版社 pp. 124-141

### 瀋陽故宮博物館

1976 「從盛京宮殿看清初對東北統一」『文物』9 pp. 44-49

### 石康

2011 「明清戰爭中大炮的使用」『清史研究』3 pp. 143-149

### 薛虹

1988 「清太祖實錄的史料學研究」『東北師大學報』2 pp. 33-44

→『薛虹學術論集』pp. 83-102

1994 「試論滿族共同體的形形成」『薛虹學術論集』吉林文史出版社 pp. 157-176

1994 『薛虹學術論集』吉林文史出版社 577p

**薛瑞録**

- 1987 「關於尚可喜叛明投金問題」『清史研究通訊』  
2 pp. 11-13  
戚福康「皇太極統治時期後金(清)与周辺貿易之研究」『吉林師範学院学報』6  
→『中国東北民族与疆域研究』時代文芸出版社、2001 pp. 302-309

**蘇双碧主編**

- 1996『洪承畴研究』中国社会科学出版社 379p

**宋慧娟**

- 2009「崇徳年間皇太極對朝鮮の軍事征調述論」  
『東北边疆歴史与文化研究』吉林人民出版社  
pp. 113-123  
2011「宣祖時期朝鮮与建州女真關係の調試」『東北史地』4 pp. 51-54

**曹徳全**

- 2005「關於赫圖阿拉城幾個問題的探討」傅波主編  
『赫圖阿拉与滿族姓氏家譜研究』遼寧民族出版社  
pp. 36-46

**孫衛國**

- 2004「登萊事変及其對明、後金与朝鮮的影響」  
『韓國学論文集』13 pp. 28-40

**孫小雲**

- 1984「論袁崇煥与己巳之變」『安徽史学』6  
pp. 31-37

**孫靜**

- 2006「試論八旗漢軍与滿洲的差異性」『中央民族大学学報(哲学社会科学版)』5 pp. 51-57  
2008『滿洲民族共同体形成歷程』遼寧民族出版社 265p

**孫文良**

- 1962「明代的遼東和明末遼事問題」『歴史教学』10  
pp. 21-25  
→『滿族崛起与明清興亡』pp. 109-117  
1964「薩爾浒之戰」『歴史教学』8 pp. 2-6  
→『滿族崛起与明清興亡』pp. 221-229  
1980「論明与後金の遼瀋之戰」『社会科学輯刊』5  
pp. 83-91  
→『滿族崛起与明清興亡』pp. 230-250  
1982a「鈹稅監高淮乱遼述略」『明史研究論叢』1  
pp. 248-264  
→『滿族崛起与明清興亡』pp. 173-190  
1982「論明与清松錦決戰」『遼寧大学学报』5

pp. 49-56

- 『滿族崛起与明清興亡』pp. 251-268  
1986「論滿族的崛起」『民族研究』1 pp. 7-15  
→『滿族崛起与明清興亡』pp. 1-16  
1990「明朝興亡所繫遼東之得失」『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』上、汲古書院  
pp. 645-662  
→『滿族崛起与明清興亡』pp. 87-108  
1991a「論明末遼東總兵李成梁」『明史研究』1  
pp. 159-172  
→『滿族崛起与明清興亡』pp. 148-172  
1991「論清初滿漢民族政策的形成」『遼寧大学学报』1  
pp. 89-94  
→『滿族崛起与明清興亡』pp. 314-326  
1983李治亭『清太宗全伝』吉林人民出版社 455p  
1986李治亭『明清戦争史略』遼寧人民出版社 566p  
1992『滿族崛起与明清興亡』遼寧大学出版社 378p
- 孫与常**
- 1985「明万曆年間遼東人民的抗倭援朝闘争」『社会科学輯刊』5 pp. 63-68  
1994「評熊廷弼第二次經略遼東」『明史研究專刊』11  
pp. 109-130
- 達力扎布**
- 1998「清初内扎薩克旗的建立問題」『歴史研究』1  
pp. 20-30  
→『明清蒙古史論稿』pp. 260-272  
2001「蒙古文档案研究—有関喀喇沁部档案識积」  
『民族史研究』2、2001  
→『明清蒙古史論稿』pp. 334-371  
2003a「蒙古文档案研究—有関東土默特部档案識积」  
『明清蒙古史論稿』pp. 372-387  
2003b「蒙古文档案研究—有関科爾沁部档案識积」  
『明清蒙古史論稿』pp. 388-421  
2011「清太宗和清世祖對漠北喀爾喀部的招撫」『歴史研究』2 pp. 50-62  
2003『明清蒙古史論稿』民族出版社 421p
- 戴鴻義**
- 1989「明末遼東傑出將領熊廷弼」『社会科学輯刊』4  
pp. 89-92
- 単鈴**
- 2000「舒爾哈齊述評」『滿族研究』3 pp. 29-33
- 中国人民大学清史研究所**
- 1985中国第一歴史档案館訳『盛京刑部原档 清太

宗崇徳三年至崇徳四年』群衆出版社 189p

### 中国第一歴史档案館

- 1981a 「明与後金大凌河城之戦史料片断」『歴史档案』1 pp. 19-30
- 1981b 「明軍守衛松山等城堡の六件戦報」『歴史档案』2 pp. 3-8, 47
- 1982a 「崇禎七年後金对関内の入擾」『歴史档案』2、3 pp. 3-19、pp. 3-13
- 1982b 「清崇徳三年漢文档案選編」『歴史档案』2 pp. 20-34
- 1985 「崇禎十三年遼東戦守明档選(上、下)」『歴史档案』1、2 pp. 3-14、pp. 3-13
- 2000-01 「天聰五年八旗值月档(一~四)」『歴史档案』00-4、01-1、01-2、01-3 pp. 3-12、pp. 5-18、pp. 3-20、pp. 9-18
- 1989 『清初内国史院滿文档案訳編(上、中、下)』光明日報出版社

### 張維華

- 1954 「滿洲未統治中国前の社会形態」『文史哲』10 pp. 38-48

### 張隱剛

- 2009 「努爾哈赤和皇太極的“虚辺実内”政策研究」『蘭州大学学报(社会科学版)』6 pp. 45-50

### 張羽新

- 1988 「努爾哈赤对蒙古族的政策」『滿族研究』2 pp. 21-25

### 趙雲田

- 1980 「試論清太祖太宗時期对漠南蒙古的關係和政策」『北京師院学报』2 pp. 57-62

### 張佳生

- 2007 「論八旗入関前民族人口の遷徙集結及其作用」『滿族研究』3 pp. 46-63  
→『八旗十論』pp. 90-125
- 2008a 王明霞 「論滿族入関前の民族認同意識」『中央民族大学学报(哲学社会科学版)』5 pp. 11-18  
→『八旗十論』pp. 70-89
- 2008b 「八旗制度对滿洲的整合作用三論」『八旗十論』遼寧民族出版社 pp. 126-229
- 2008c 王明霞 「“漢人滿化”現象研究」『社会科学輯刊』4 pp. 134-140
- 2008d 『八旗十論』遼寧民族出版社 346p

### 趙琦

- 1997a 「試論後金時期蒙古八旗的形成」『內蒙古大学学报(人文社会科学版)』3 pp. 3-11
- 1997b 「明末清初的哈喇慎蒙古八旗」『蒙古史研究』5 pp. 219-231

### 趙綺娜

- 1973 「清初八旗漢軍研究」『故宮文献』4-2 pp. 23-36

### 張玉興

- 1981 「關於薩爾滸之戰役性質商榷」『北京大学学报』4 pp. 57-61
- 1985 「論岳託」『東北地方史研究』4 pp. 38-45
- 1988 「努爾哈赤与納林布録」『滿族研究』2 pp. 14-20
- 1990 「十七世紀前期明清議和述評」『中国社会科学院研究生院学报』3 pp. 74-80
- 1998 「明清之際反民族压迫斗争中歷史人物的褒善貶惡」『清史研究』2 pp. 102-112

### 張敬媛

- 1993 「皇太極与紅夷炮」『滿族研究』3 pp. 7-10

### 張杰

- 2008 「後金時期滿族与朝鮮貿易」『遼寧大学学报(哲学社会科学版)』3 pp. 73-78

### 趙広慶

- 1994 「降金漢官李永芳」傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社 pp. 241-246
- 1994 「努爾哈赤時期的農耕」傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社 pp. 44-51

### 張鴻翔

- 1950 「努爾哈赤受明封賞考実」『燕京学报』38、1950  
→存萃学社編『清史論叢』第二集、大東圖書公司、1977 pp. 151-165

### 張国光

- 1982 李梅吾 「重評楊嗣昌、盧象昇等關於对清講和問題的政見之争」『社会科学輯刊』1 pp. 91-100

### 張彩雲

- 2009 王偉 「明清之際遼東軍事變遷：以熊廷弼三次統帥遼東為視角」『長春工業大学学报(社会科学版)』2 pp. 105-108

### 刁書仁

- 1987 「試論努爾哈赤征烏拉之戰」『吉林師範学院学报』2 pp. 43-47  
→『明清東北史研究論集』pp. 347-356

- 1990a 「哈達部興衰考論」『吉林師範学院學報』2  
→『明清東北史研究論集』pp. 368-373
- 1990b 「略論八旗土地制度形成的条件」『北方文物』2 pp. 78-81  
→『明清東北史研究論集』pp. 1-8
- 1993 「論明代女真人的村屯組織与八旗牛录制的關係」李洵主編『明史論集』吉林文史出版社 pp. 523-532  
→『明清東北史研究論集』pp. 357-367
- 2001a 「朝鮮使臣所見的建州社会—兼論後金建国前与朝鮮的關係—」『滿族研究』2 pp. 31-37  
→『明清中朝日關係史研究』pp. 171-185
- 2001b 「論薩爾滸之戰前後、後金与朝鮮的關係」『清史研究』4 pp. 43-50  
→『明清中朝日關係史研究』pp. 186-207
- 2001c 「論皇太極兩次对朝鮮的戰爭」『明清中朝日關係史研究』吉林文史出版社、2001 pp. 206-241
- 2004 「論後金建立前与朝鮮的關係」『社会科学戰線』1 pp. 247-250  
→『明清中朝日關係史研究』pp. 152-170
- 2009 「舒爾哈齊史事考実」『東北边疆歴史与文化研究』吉林人民出版社、2009 pp. 225-237
- 2011 「論皇太極对遼東漢人政策的調整—以对遼官、遼將的爭取為中心」『社会科学輯刊』1 pp. 175-180
- 1995 『明清東北史研究論集』吉林文史出版社 504p
- 2001 『明清中朝日關係史研究』吉林文史出版社 391p
- 張小青**  
1986 「明清之際西洋火炮的輸入及其影響」『清史研究集』4 pp. 48-106
- 張璇如**  
1982 「滿族入関前社会性質討論綜述」『民族研究』6 pp. 42-50
- 張存武**  
「清韓關係 1636-1644」『故宮季刊』4-1、4-2、1969  
→『清代中韓關係論文集』台湾商務印書館、1987 pp. 1-71
- 張丹卉**  
2004a 「关于滿族形成的若干問題的考辨」『社会科学戰線』1 pp. 146-151
- 2004b 「論明清之際東北边疆城鎮的衰落」『中国边疆史地研究』1 pp. 56-66
- 晁中辰**  
1995 「滿清入関前与李氏朝鮮的關係」北京大學韓國學研究中心編『韓國學論文集』4 pp. 242-249
- 趙中學**  
1989 「明清之際的遼東軍墾社会」『近代中国初期歴史研討會論文集』中央研究院近代史研究所→『近世東三省研究論文集』成文出版社、1999 pp. 665-681
- 趙展**  
1980 「再論滿族入関前的社会性質」『東北師大學報』4 pp. 13-22
- 張德玉**  
1989 「薩爾滸之役後金參戰兵力再探」『滿族研究』3 pp. 12-15  
→傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社、1994 pp. 115-120
- 2001 『滿族發源地歴史研究』遼寧民族出版社 452p
- 趙明**  
1994 「入関前八旗兵丁的經濟負擔」『歴史教学』11 pp. 3-7
- 趙連穩**  
1991 「鈛稅監高淮乱遼事評」『東北地方史研究』3 pp. 65-71
- 趙令志**  
1995 「試論皇太極時期的旗地政策」『滿族研究』1 pp. 24-28
- 1997 「再論“計丁授田”問題」『中央民族大学學報(社会科学版)』4 pp. 62-68
- 2001 『清前期八旗土地制度研究』民族出版社 371p
- 趙亮**  
2007 「浅析明末東北重政治格局中的東江因素」『滿族研究』2 pp. 29-35
- 陳安麗**  
1990 石斌 「袁崇煥与蒙古」『內蒙古大學學報(哲学社会科学版)』2 pp. 51-59
- 陳永祥**  
2009 「舒爾哈齊死因考」『滿族研究』2 pp. 61-70
- 陳佳華**  
1980 傅克東 「八旗制度中的滿蒙漢關係」『民族研究』6 pp. 24-56  
→中国社会科学院民族研究所編『滿族史研究集』

- 中国社会科学出版社、1988 pp. 228-258
- 1981a 傅克東「八旗建立前滿洲牛泉和人口初探」  
『中央民族大学學報(哲学社会科学版)』1  
pp. 35-46  
→中国社会科学院民族研究所編『滿族史研究集』  
中国社会科学出版社、1988 pp. 259-280
- 1981b 傅克東「八旗漢軍考略」『民族研究』5  
pp. 17-30  
→中国社会科学院民族研究所編『滿族史研究集』  
中国社会科学出版社、1988 pp. 281-306
- 1982a 傅克東「清代前期的佐領」『社会科学戰線』  
1 pp. 164-173  
→傅克東「佐領述領」中国社会科学院民族研究  
所編『滿族史研究集』中国社会科学出版社、1988  
pp. 307-336
- 1982b 傅克東「清初滿洲牛泉的特徵」『社会科学輯  
刊』5 pp. 99-106
- 1984a 「清初四百牛泉考釋」『黑龍江文物叢刊』3  
pp. 9-18
- 1984b 「八旗制度研究述略」『社会科学輯刊』5、  
6 pp. 109-116、pp. 113-120
- 陳梧桐**
- 1996 「明清松錦之戰与洪承疇的功過評價」『中央民  
族大學學報』4 pp. 55-61
- 陳作榮**
- 1988 「天啓間孫承宗督遼業績述略」『東北師大學報  
(哲学社会科学版)』3 pp. 30-35, 57
- 陳生璽**
- 1983 「關於毛文龍之死」『社会科学輯刊』2  
pp. 121-127  
→『明清易代史獨見』pp. 211-226
- 1987 「明末蒙古各部的紛争与清(後金)对漠南蒙古  
的征服」『南開學報』1 pp. 61-69  
→『明清易代史獨見』pp. 193-210
- 1988a 「論明清松錦之戰与洪承疇援遼的失敗」  
『渤海學刊』1、2 pp. 7-16、pp. 71-77  
→『明清易代史獨見』pp. 1-32
- 1988b 「蒙古八旗与漢軍八旗建立的過程」『史學月  
刊』6 pp. 100-102
- 1989 「松錦之戰後明清議和始末」『渤海學刊』3  
pp. 32-42, 141  
→『明清易代史獨見』pp. 33-56
- 1993 「論毛文龍的鎮江之役」『第二屆明清史國際學

- 術討論會論文集』天津人民出版社 pp. 542-550
- 1995 「明將毛文龍在朝鮮的活動」『商鴻達教授逝世  
十周年紀念論文集』北京大学出版會 pp. 64-70
- 1991 『明清易代史獨見』中州古籍出版社 276p
- 陳捷先**
- 1963 「清太祖推刃胞弟考」『滿洲叢考』台灣大學文  
學院 pp. 65-78
- 1992 「三田渡滿文清文宗功德碑研究」『滿學研究』1、  
吉林文史出版社 pp. 139-151
- 1995a 「清太祖時期滿洲与朝鮮關係」刁書仁主編『中  
朝關係史研究論文集』吉林文史出版社  
pp. 274-298
- 1995b 「略論天聰年間後金与朝鮮關係」刁書仁主編  
『中朝關係史研究論文集』吉林文史出版社  
pp. 299-321
- 陳陶然**
- 2011 「試論努爾哈赤对烏拉部採取的關争策略」  
『哈爾濱師範大學社会科学學報』2 pp. 145-149
- 陳文石**
- 1961 「清人入關前的農業生活—太祖時代(上、下)」  
『大陸雜誌』22-9、22-10  
→『明清政治社会史論』上 pp. 327-363
- 1962 「清人入關前的手工業」『中央研究院歷史語言  
研究所集刊』34上 pp. 291-321  
→『明清政治社会史論』上 pp. 283-316  
→存萃學社編『清史論叢』第一集、大東圖書公  
司、1977 pp. 311-341
- 1968 「清太宗時代的重要政治措施」『中央研究院歷  
史語言研究所集刊』40上 pp. 295-371  
→『明清政治社会史論』下 pp. 423-525
- 1971 「滿洲八旗的戶色名色」『中央研究院歷史語言  
研究所集刊』43-2 pp. 239-258  
→『明清政治社会史論』下 pp. 553-578
- 1991a 「滿洲八旗牛泉的構成」『明清政治社会史論』  
下 pp. 527-551
- 1991b 「清太宗時代的農業生活」『明清政治社会史  
論』上 pp. 365-422
- 1991 『明清政治社会史論』上下、台灣學生書局  
422p、396p
- 陳力**
- 2011 「近二十年關於滿族形成時間研究綜述」『滿族  
研究』2 pp. 58-62

**陳澧**

- 1984 「論代善の歴史地位与作用」『社会科学輯刊』5 pp. 102-108
- 1988 「努爾哈赤与女真族社会变革」『社会科学輯刊』2 pp. 60-65
- 1989 「袁崇煥与遼東戰局」『史学集刊』2 pp. 25-30
- 2004 「論後金之崛起与改革開放」『北方論叢』3 pp. 94-97
- 2009 「努爾哈赤崛起与李成梁關係史事鉤沉」『滿族研究』1 pp. 39-44

**鄭玉英**

- 1983 「試論清初八旗蒙古問題」『遼寧大學學報』1 pp. 60-63

**鄭天挺**

- 1962 「清入關前滿洲族的社会性質」『歷史研究』6 pp. 87-96  
→『探微集』pp. 1-15  
→『清史探微』pp. 404-417
- 1979 「清入關前滿族的社会性質統探」『南開大學學報』4  
→『探微集』pp. 16-32  
→『清史探微』pp. 418-433
- 1982 「滿族的統一」『南開學報』5 pp. 3-8  
→『清史探微』pp. 378-388
- 1983 「從『清太祖武皇帝實錄』看滿族族源」『社会科学戰線』3 pp. 172-174  
→『清史探微』pp. 389-393
- 1980 『探微集』中華書局 466p
- 1999 『清史探微』北京大學出版社 435p

**鉄玉欽**

- 1982 「論清入關前都城城郭与宮殿的演變」『明清史國際學術討論會論文集』天津人民出版社 pp. 637-658

**杜家驥**

- 1987 「清代八旗領屬問題考察」『民族研究』5 pp. 83-91
- 1991 「清代八旗制度中“抬旗”」『史学集刊』4 pp. 48-52
- 1997 「天命後期八旗旗主考析」『史学集刊』2 pp. 25-30
- 1998a 「清太宗出身考」『史学月刊』5 pp. 39-42
- 1998b 「清入關前的分封制總論」『學習与探索』3 pp. 129-135

- 2005 「撫順額駙李永芳後裔略考」傅波主編『赫圖阿拉与滿族姓氏家譜研究』遼寧民族出版社 pp. 142-150
- 1998 『清皇族与國政關係研究』五南圖書出版公司 556p
- 2003 『清朝滿蒙聯姻研究』人民出版社 702p
- 2008 『八旗与清朝政治論稿』人民出版社 563p

**杜成安**

- 2003 「女真官制与滿族共同体的形成」『中央民族大學學報(哲学社会科学版)』4 pp. 100-104

**佟永功**

- 2009a 「皇太極与漢軍八旗的設立」『歷史档案』4 pp. 32-38
- 2009b 「關於佟養性研究中的幾個問題」『滿族研究』4 pp. 45-47
- 2009c 「《天聰九年檔》的漢譯及其史料價值」『滿語文与滿文档案研究』遼寧民族出版社 pp. 152-160

**陶希聖**

- 1934 「滿族入關前的俘虜与降人」『食貨』2-12 pp. 31-37

**滕紹箴**

- 1980a 「評努爾哈赤」『社会科学輯刊』6 pp. 84-94
- 1980b 「試論明与後金戰爭的原因及其性質」『民族研究』5 pp. 11-20
- 1982a 「入關前滿族的社会經濟概論」『中国史研究』1 pp. 44-52
- 1982b 「談皇太極的求和及其真意」『求是學刊』3 pp. 84-89
- 1986 「從《滿文老檔》看努爾哈赤的天命思想」『社会科学輯刊』1 pp. 51-57
- 1988 「試論後金国的形成、性質及其特点」王鍾翰主編『滿族史研究集』中国社会科学出版社 pp. 69-125
- 2001 「努爾哈赤時期牛录考」『民族研究』6 pp. 47-57
- 2007 「清初漢軍及其牛录探源」『滿族研究』1 pp. 60-72
- 1985 『努爾哈赤評伝』遼寧人民出版社 402p

**佟鏞**

- 1987 「從努爾哈赤的經濟要求看明与後金之間的關係」『社会科学輯刊』5 pp. 59-64

**湯代佳**

1996「努爾哈赤時期科爾沁部与滿洲的關係」『西北史地』4 pp. 46, 59-63

**董万命**

1983「清初瓦爾喀部安楚拉庫、内河二路考異」

『黑龍江文物叢刊』3 pp. 21-25

1992「論滿族三仙女神話的形成与價值」『民族研究』3 pp. 32-39

1995「努爾哈赤早期漢人顧問龔正陸」『黑龍江民族叢刊』4 pp. 65-69

2002「清始祖禰祥地伝説研究的反思」『滿語研究』1 pp. 63-68

**那曉波**

1986「論清入關前对黑龍江流域各族实行的和親政策」『黑龍江民族叢刊』4 pp. 30-35

1987「試論清入關前对黑龍江流域各族的政策」『黑龍江民族叢刊』4 pp. 45-51

**南炳文**

1990「關於万曆時期的鈐監稅使」『社会科学輯刊』3 pp. 95-101

**任玉雪**

2004「八旗牛泉起源時間問題再探」『滿族研究』1 pp. 79-88

**任長正**

1990「清太祖太宗時代明清和戰考」『清史及近代史研究論集』大陸雜誌社 pp. 23-59

→『边疆論文集』1、国防研究院、1964 pp. 276-313

**葉高樹**

1995「清入關前統御漢官的策略」『史耘』1 pp. 89-113

2009「明清之際遼東的軍事家族—李、毛、祖三家的比較」『台灣師大歷史學報』42 pp. 121-196

1993『降清明將研究(1618-1683)』国立台灣師範大學歷史研究所專刊23 371p

**巴根那**

2000「天命十年八月至天聰三年二月科爾沁部与愛新國連盟」『明清档案与蒙古史研究』1、內蒙古人民出版社 pp. 157-195

**馬玉良**

1986「「薩爾滸山之戰書事」碑与薩爾滸之戰」『瀋陽師範學院學報』2 pp. 27, 95-99

2005「後金封建化進程中民族矛盾的長消」『學習与

探索』4 pp. 147-149

**馬楚堅**

1993「西洋大炮对明金態勢的改变」羅炳錦、劉健明編『明末清初華南地区歷史人物功業研討會論文集』香港中文大學歷史學系 pp. 11-30

→『明清辺政与治乱』天津人民出版社、1994 pp. 163-188

**馬涉湘**

1991「滿族入關前生活方式变化的歷史思考」『社会科学輯刊』1 pp. 91-96

**馬奉琛**

1935「滿族未入關前的經濟生活」『食貨半月刊』1-6 pp. 30-46

→池田孝訳「滿族入關前の經濟生活」『滿鉄調査月報』17-7、1937 pp. 163-183

**白洪希**

1997「皇太極綏服漠南蒙古及其作用」『社会科学輯刊』4 pp. 97-101

2007『清入關前都城研究』遼寧大學出版社 237p

**白新良**

1981a「論皇太極繼位初的一次改旗」『南開史學』2 pp. 23-100

1981b「努爾哈赤時期八旗左右翼小考」『歷史档案』4 pp. 128, 133-134

1982「後金五大臣旗籍辨正」『南開學報』5 pp. 62-65

1983「滿洲政權早期前四旗考」『南開史學』1 pp. 159-176

1997「薩爾滸之戰与朝鮮出兵」『清史研究』3 pp. 9-15

1998「試論努爾哈赤時期滿洲政權的中樞決策」『南開學報』1 pp. 40-4

**白鳳岐**

1990「試析明末清初滿族、蒙古族關係史上的因果性」『滿族研究』1 pp. 17-28

**莫東寅**

1958a「明末建州女真的發展及其建国」『滿族史論叢』生活讀書新知三聯書店 pp. 44-94

→中国人民大学清史研究所編『清史論文選集』1、中国人民大学出版社、1979 pp. 68-109

1958b「八旗制度」『滿族史論叢』生活讀書新知三聯書店 pp. 95-174

**傅克東**

1988「後金設立蒙古二旗及漠南地区旗新探」『民族研究』2 pp. 23, 41-47

**傅波主編**

1994『清前史論叢』遼寧人民出版社 395p  
 2004『滿族佟佳氏研究』遼寧民族出版社 345p  
 2005『赫圖阿拉与滿族姓氏家譜研究』遼寧民族出版社 546p  
 2008『從興京到盛京 努爾哈赤崛起軌跡探源』遼寧民族出版社 466p

**文鐘哲**

1997「滿洲複合民族中的朝鮮族旗人及其後裔的族屬問題」『中央民族大学学報(社会科学版)』1 pp. 43-47  
 2008「薩爾滸之戰与朝鮮光海君的双边外交政策」『滿族研究』4 pp. 63-71

**馮季昌**

1991孟慶萍「清入關前的民族建置—八旗制度述論」張志立、王宏剛主編『東北亞歷史与文化』遼瀋書社、1991 pp. 588-597

**馮佐哲**

1990「袁崇煥与興城」『北方論叢』1 pp. 101-106

**馮年臻**

1985「舒爾哈齊死因新探」『社会科学輯刊』3 pp. 88-95

**辺佐卿**

1994「試論佟養性」傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社 pp. 297-306  
 1994b閔晶「試論褚英」傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社 pp. 288-296

**宝日吉根**

1980「科爾沁部与滿洲早期關係初探」『中国蒙古史学会論文選集』1980 pp. 416-425  
 1981「清初科爾沁部与滿洲的關係」『民族研究』4 pp. 46-52, 62

**朴今海**

2004「17世紀朝鮮人流入東北及其对後金(清)社会的影響」『黒龍江民族叢刊』1 pp. 61-65

**牟潤孫**

1987「明末西洋大炮由明入後金考略」『注史齋叢稿』中華書局 pp. 415-444

**孟昭信**

1981a「《毛文龍來書》試析」『史学集刊』10

pp. 64-68

1981b「皇太極改革綜述」『中国古代史論叢』2 pp. 304-323  
 1989「『盛京刑部原档』与清入關前史研究」『史学集刊』3 pp. 38-44  
 1992「八旗初創期旗制考略」『史学集刊』4 pp. 19-24  
 →『第二届明清史國際學術討論會論文集』天津人民出版社、1993 pp. 522-534  
 2007a「抗清功績不可泯—試談毛文龍評價問題」『東北史地』1 pp. 77-82  
 2007b「“東江移鎮”及相關問題辨析—再談毛文龍評價問題」『東北史地』5 pp. 20-28  
 2008「堅拒誘降与相機議和—三談毛文龍評價問題」『東北史地』3 pp. 9-13, 68

**孟森**

1932「清始祖布庫里英雄考」『中央研究院歷史語言研究所集刊』3-3 pp. 345-352  
 →『明清史論著集刊統編』pp. 61-72  
 1935「清太祖告天七大恨之真本研究」『史学』1  
 →『明清史論著集刊』上 pp. 203-217  
 →『明清史論著集刊』上 pp. 254-268  
 1936「八旗制度考実」『中央研究院歷史語言研究所集刊』6-3 pp. 343-412  
 →『明清史論著集刊』上 pp. 218-310  
 →存萃學社編『清史論叢』第二集、大東圖書公司、1977 pp. 1-70  
 1959a「清太祖殺弟事考実」『明清史論著集刊』上 pp. 174-182  
 →『明清史論著集刊』上 pp. 225-233  
 1959b「清太祖起兵為父祖復讐事詳考」『明清史論著集刊』上 pp. 158-173  
 →『明清史論著集刊』上 pp. 208-224  
 1980「關於劉愛塔事迹的研究」『清史論叢』2 pp. 215-228  
 →『明清史論著集刊』上 pp. 117-143  
 1959『明清史論著集刊』上、下、中華書局 310p、324p  
 1986『明清史論著集刊統編』中華書局 558p  
 2006『明清史論著集刊』上、下、中華書局 382p、419p

**蒙林**

1989「天命年間後金与索倫部的關係」『內蒙古社会

- 科学』5 pp. 65-67
- 喻蓉蓉**  
2010『熊廷弼与遼東經略』花木蘭文化出版社 302p
- 余三樂**  
1989「明末党争中的孫承宗」『史学集刊』2 pp. 30-35
- 余梓東**  
2002「論後金政權民族政策的形成」『滿族研究』3 pp. 18-25  
2009「論後金政權民族政策的啓示」『中央民族大学学报(哲学社会科学版)』1 pp. 35-42
- 楊海英**  
2006『洪承疇与明清易代研究』商務印書館 472p
- 楊学琛**  
1981「略論清代滿漢關係的發展和变化」『民族研究』6 pp. 16-26  
1988「滿族興起与東北民族關係的变化」『滿族研究』3 pp. 18-23
- 楊清江**  
1996「洪承疇伝記六種史料比勘」『清史研究』3 pp. 103-109
- 楊珍**  
2000「後金八王共治国政制研究」『中国史研究』1 pp. 116-129
- 姚念慈**  
1991「天命年間都堂初探」『清史研究』3 pp. 1-7, 32  
1993「清入關前六部的特点及權力变化」『慶祝王鐘翰先生八十寿辰學術論文集』遼寧大学出版社 pp. 7-25  
1995「略論八旗蒙古和八旗漢軍的建立」『中央民族大学学报』6 pp. 26-31  
2008「滿族八旗制国家初探」『清初政治史探微』遼寧民族出版社 pp. 8-243
- 羅繼祖**  
1981「十七世紀初遼東人民抗後金的鬭争」『史学集刊』10 pp. 53-63
- 羅志歆編**  
2005『袁崇煥研究論文選集』廣東人民出版社 862p
- 羅炳錦**  
1993「天啓朝袁崇煥人際關係的变化」羅炳錦、劉健明編『明末清初華南地区歷史人物功業研討會論文集』香港中文大學歷史學系 pp. 47-63
- 蘭書臣**  
2005「努爾哈赤遷都考」傅波主編『赫圖阿拉与滿族姓氏家譜研究』遼寧民族出版社 pp. 13-31
- 李燕光**  
1961「1644年以前滿族的社会經濟形態」『光明日報』1961年12月22日  
→中国人民大学清史研究所編『清史論文選集』1、中国人民大学出版社、1979 pp. 139-148  
1992「清代的八旗漢軍」『滿学研究』1 pp. 91-103
- 李学智**  
1963「滿人称謂『漢人』為『尼堪』意義之憶測」『大陸雜誌』特刊2輯  
→『边疆論文集』2、国防研究院、1964 pp. 898-902  
1968「清太宗崇德三年向朝鮮強索向化女真事的一件滿文档案」『田村博士頌寿東洋史論叢』pp. 683-709  
1974「老滿文原档中所載清代八旗制度創立史料之檢討」『辺政研究所年報』5 pp. 67-120
- 李旭**  
1964「論八旗制度」『中華文史論集』5  
→中国人民大学清史研究所編『清史論文選集』中国人民大学出版社、1979 pp. 241-256
- 李勤璞**  
2000「明末遼東辺務喇嘛」『中央研究院歷史語言研究所集刊』71-3 pp. 563-617
- 李賢淑**  
2008「論朝鮮李適之乱与韓潤的來降」傅波主編『從興京到盛京—努爾哈爾赤崛起軌跡探源』遼寧民族出版社 pp. 449-462
- 李景蘭**  
1984「試論努爾哈赤推行的“計丁授田”与“分丁編庄”政策」『社会科学輯刊』1 pp. 88-94  
1985金殿士「古城遼陽与清初的東京城」『東北地方史研究』4 pp. 45-52  
1986「關於努爾哈赤長子褚英之死」『故宫博物院院刊』1 pp. 59-62  
1987「後金(清)臨時国都—薩爾滸山城」『故宫博物院院刊』2 pp. 21-25
- 李興華**  
2010「清入關前商業貿易」『滿族研究』2 pp. 15-20
- 李光涛**  
1947a「清入關前之真象」『中央研究院歷史語言研

- 究所集刊』12 pp. 129-171  
 →存萃学社編『清史論叢』第二集、大東図書公司、1977 pp. 54-96  
 →『明清档案論文集』pp. 361-392
- 1947b「明季边防与袁崇煥」『国防月刊』4-4、1947  
 →『明代边防 明史論叢之六』学生書局、1968 pp. 113-130  
 →『明清史論集』上 pp. 358-372
- 1947c「記奴兒哈赤之倡乱及薩爾滸之戰」『中央研究院歷史語言研究所集刊』12 pp. 173-191  
 →『明清史論集』上 pp. 195-210  
 →存萃学社編『清史論叢』第二集、大東図書公司、1977 pp. 203-221
- 1947d「記崇禎四年南海島大捷」『中央研究院歷史語言研究所集刊』12 pp. 241-250  
 →『明清档案論文集』pp. 485-492  
 →存萃学社編『清史論叢』第二集、大東図書公司、1977 pp. 348-357
- 1948a「洪承畴背明始末」『中央研究院歷史語言研究所集刊』17 pp. 227-301  
 →『明清档案論文集』pp. 631-686
- 1948b「論崇禎二年『己巳虜變』」『中央研究院歷史語言研究所集刊』18 pp. 449-484  
 →『明清档案論文集』pp. 457-484
- 1948c「毛文龍釀乱東江本末」『中央研究院歷史語言研究所集刊』19 pp. 367-488  
 →『明清档案論文集』pp. 163-250
- 1956「洪承畴援遼始末」『大陸雜誌』12-12 pp. 80-88  
 →『明清史論集』下 pp. 555-572
- 1968「跋《毛大將軍海上情形》」『中央研究院歷史語言研究所集刊』38 pp. 247-250  
 →『明清档案論文集』pp. 251-274
- 1971「明季『虜禍』中之松錦戰役与壬午戰役」『明清史論集』上、台湾商務印書館 pp. 57-84
- 1971『明清史論集』上、下、台湾商務印書館 371p、377p
- 1976『熊廷弼与遼東』中央研究院歷史語言研究所專刊68 265p
- 1986『明清档案論文集』聯經事業出版公司 1074p
- 李鴻彬**
- 1979a「清入関前滿族的社会性質」『社会科学輯刊』2 pp. 120-127
- 1979b「論薩爾滸之戰」『中央民族学院学報』1・2 pp. 48-58
- 1980a「論滿族英雄努爾哈赤」『清史論叢』2 pp. 229-243
- 1980b「努爾哈赤之死」『社会科学戰線』2 pp. 194-196
- 1981a「皇太極後嗣的幾個問題」『歷史档案』3 pp. 100-106
- 1981b郭成康「努爾哈赤一六〇一年建旗考辨」『故宮博物院院刊』4 pp. 18-23, 35
- 1981c「論明清松錦之戰」『遼寧師院学報』6 pp. 49-54
- 1982郭成康「清入関前八旗主旗貝勒的演变」『社会科学戰線』1 pp. 154-163
- 1983a「皇太極時期明清(後金)關係初探」『遼寧大學学報』1 pp. 54-59
- 1983b「論寧遠之戰」『北京大學学報』5 pp. 21-27
- 1984a郭成康「八旗建立年代考異」『社会科学輯刊』1 pp. 95-98
- 1984b「試論洪承畴在清初統一過程中的歷史作用」『史学集刊』3 pp. 29-35
- 1984c「試論広寧之戰」『瀋陽師範学院社会科学学報』3 pp. 74-80
- 1987a「皇太極与松錦大戰」『史学集刊』2 pp. 37-45
- 1987b「試論“丁卯之役”」『社会科学戰線』4 pp. 192-198
- 1990「袁崇煥与寧遠」『史学月刊』1 pp. 24-31
- 1992「清朝開国与对明議和策略」『史学集刊』2 pp. 35-44
- 1997a「試論皇太極与大凌河之戰」『史学集刊』1 pp. 12-18
- 1997b「皇太極与火炮」『歷史档案』2 pp. 87-93
- 1997c『清朝開国史略』齊魯書社 295p
- 2003『滿族崛起与清帝国建立』天津古籍出版社 388p
- 李光璧**
- 1957「清朝建国及天崇時期的侵明戰爭」李光璧主編『明清史論叢』湖北人民出版社 pp. 164-193
- 李新達**
- 1982a「入関前の八旗兵数問題」『清史論叢』3 pp. 155-163
- 1982b「關於滿洲旗制和漢軍旗制的始建時間問題」

『清史論叢』4 pp. 216-223

1984 「洪承疇述評」『清史論叢』5 pp. 221-238

1986 「關於洪承疇降清問題」『清史論叢』7 pp. 125-135

1992 『洪承疇伝』四川人民出版社 254p

#### 李治亭

1981 「清朝入関前の民族政策」『中国古代史論叢』2 pp. 286-303

1983 「論清太宗对黑龍江流域の統一」『北方論叢』4 pp. 103-108

1995 「後金(清)与李氏朝鮮戦争述略」刁書仁主編『中朝關係史研究論文集』吉林文史出版社 pp. 258-273

#### 李洵

1978 「公元十五世紀到十七世紀中葉建州女真族社会性質問題的探討」『吉林師大學報(哲学社会版)』4 pp. 35-48

→『下学集』pp. 375-399

1989 「祖大寿与“祖家将”」『社会科学輯刊』2·3 pp. 169-175

→『下学集』pp. 400-411

1990 「論明朝的全遼政策」『鄭天挺紀念論文集』中華書局 pp. 389-419

→『下学集』pp. 352-374

2004 「清太宗与祖大寿」『李洵先生紀念文集』東北師範大學出版社 pp. 126-149

1995 『下学集』中国社会科学出版社 495p

#### 李新成

2011 「明代遼東名將李如松」『鞍山師範學院學報』2 pp. 41-44

#### 李成燕

2002 「尚可喜之降与毛文龍之死」『鞍山師範學院學報』2 pp. 43-45

#### 李善洪

1995 「後金朝鮮“丁卯之役”原因淺析」刁書仁主編『中朝關係史研究論文集』吉林文史出版社 pp. 322-328

#### 李宗侗

1967 「清代中央政權形態的演變」『歷史語言研究所集刊』37上、1967 pp. 75-158

→存萃學社編『清史論叢』第二集、大東圖書公司、1977 pp. 71-150

#### 李保文

2000 「愛新國天命天聰兩朝蒙古文文書檔案簡介」『明清檔案与蒙古史研究』1、內蒙古人民出版社 pp. 217-276

#### 李宝臣

2008 「“五年復遼”与袁崇煥之死」『紫禁城』12 pp. 196-201

#### 劉家駒

1976 「崇德改元与太宗伐朝鮮之役」『沈剛伯先生八秩榮慶論文集』聯經出版事業公司

pp. 485-518 →『清朝初期的中韓關係』

pp. 99-148

1978 「清初漢軍八旗的肇建」『清初政治發展史論集』台灣商務印書館 pp. 1-32

1983 「清初朝鮮世子等入質瀋陽始末」『中韓關係史國際研討會論文集』pp. 185-203

→『清朝初期的中韓關係』pp. 149-180

1986 『清朝初期的中韓關係』文史哲出版社 396p

#### 柳海松

1989 劉金明「論達斡爾族部落首領博穆博果爾」『黑龍江民族叢刊』2 pp. 52-56

→波·少布主編『黑龍江民族歷史与文化』中央民族學院出版社、1993 pp. 308-317

2005 「論尚可喜叛明歸清」『遼寧大學學報(哲学社会科学版)』2 pp. 97-102

#### 劉德鴻

2000 「論舒爾哈齊」『滿族研究』1 pp. 38-47

#### 劉慶宇

2008 「皇太極佛教政策探研」『社会科学輯刊』4 pp. 127-133

#### 劉建新

1986 「論明清之際的松錦之戰」『清史研究集』4 pp. 1-47

#### 劉厚生

1995 「評皇太極在明清決戰前夕的重大舉措—從滿文《天聰九年檔》所見」『社会科学戰線』3 pp. 149-155

1999 「本世紀中日學者《旧滿洲檔》和《滿文老檔》研究述評」『民族研究』1 pp. 101-108

1993 『旧滿洲檔研究』吉林文史出版社 430p

#### 劉広銘

2004 「『建州紀程図記』中的女真人形象」『東疆學刊』4 pp. 46-52

**劉小萌**

- 1990a「論牛录固山制度的形成」『東北地方史研究』4 pp. 38-44  
→『満族の社会与生活』pp. 104-117
- 1990b「明代女真血縁組織哈拉穆昆の動態分析」『社会科学戦線』4 pp. 226-232  
→『満族の社会与生活』pp. 13-24
- 1991a「滿族肇興時期政治制度的演變」『中国社会科学院研究生院学報』2 pp. 26-33  
→『満族の社会与生活』pp. 81-95
- 1991b「明代女真的地縁組織」『民族研究』3 pp. 45-50  
→『満族の社会与生活』pp. 35-45
- 1991c「關於滿族肇興時期“兩頭政長”的撤廢問題」『慶祝王鐘翰先生八十寿辰學術論文集』遼寧大学出版社 pp. 26-30  
→『満族の社会与生活』pp. 96-103
- 1991d「清前期東北边疆“徙民編旗”考察」呂一燃『中国边疆史地論集』黑龍江教育出版社 pp. 210-230  
→『満族の社会与生活』pp. 225-243
- 1992「明代女真的血縁家族“烏克孫”」『社会科学輯刊』4 pp. 71-76  
→『満族の社会与生活』pp. 25-34
- 1994「滿族肇興時期所受蒙古文化的影響」『社会科学戦線』6 pp. 169-175  
→『満族の社会与生活』pp. 375-386
- 1995a「明代女真社会的酋長」『中国史研究』2 pp. 95-102  
→『満族の社会与生活』pp. 46-59
- 1995b「天聰年間皇太極限制貴族特權的法律措置」『滿学朝鮮学論集』中国城市出版社  
→『満族の社会与生活』pp. 135-151
- 1996a「明末女真社会氏族制度的瓦解」『中国社会科学院研究生院学報』5 pp. 43-53  
→『満族の社会与生活』pp. 60-80
- 1996b李鴻彬(柳沢明訳)「女真(滿族)のハラとムクン」『満族の家族と社会』第一書房 pp. 137-170
- 1998「有關滿族開国史的古籍整理与研究」『満族の社会与生活』北京図書館出版社 pp. 1-12
- 2010「清朝史中の八旗研究」『清史研究』2 pp. 1-6
- 1995『満族の部落与国家』吉林文史出版社
- 1998『満族の社会与生活』北京図書館出版社 386p

- 2001『満族從部落到国家的發展』遼寧民族出版社 449p
- 2007『満族從部落到国家的發展』中国社会科学出版社 346p

**劉選民**

- 1938「清開国初征服諸部疆域考」『燕京学報』23 pp. 129-182  
→存萃学社編『清史論叢』第一集、大東図書公司、1977 pp. 107-160

**劉丹**

- 1978「論努爾哈赤与明朝的關係」『遼寧大学学報』5 pp. 56-66

**劉伯涵**

- 1985「袁崇煥与孫承宗」『学术月刊』8 pp. 75-79

**劉錫**

- 2002「佛阿拉旧老城汗王宮室芻議」『故宫博物院院刊』3 pp. 41-48

**劉路**

- 1995「清太祖太宗時期滿蒙婚姻考」『故宫博物院院刊』3 pp. 67-91

**呂光天**

- 1981「論黑龍江流域上、中游各族与明清兩朝的隸属關係」『社会科学戦線』2 pp. 189-195
- 1982「明清之際黑龍江下游和庫頁島の少数民族」『社会科学輯刊』6 pp. 98-109

**魯渝生**

- 1998「論八旗中滿洲、蒙古、漢軍的關係」『滿族研究』2 pp. 43-47

**参考文献 日本語****石橋崇雄**

- 1994b「順治初纂『大清太宗文皇帝実録』の滿文本（について）」『松村潤先生古稀記念 清代史論叢』汲古書院 pp. 127-139
- 1995「清初祭典儀礼考—特に『丙子年四月<秘録>登ハン大位档』における太宗ホン・タイジの皇帝即位記事にみえる祭典記事を中心として—」『清代中国の諸問題』山川出版社 pp. 57-92
- 1999「清初入関前の無圈点滿洲文档案『先ゲンギェン=ハン賢行典例』をめぐって」『東洋史研究』58-3 pp. 52-83

2000 「無圈点満洲文档案『先ゲンギェン=ハン賢行典例・全十七条』『国史館史学』8、pp. 1-49

#### 稲葉岩吉

1931 「満洲開国説話の歴史的考察(上、下)」『青丘学叢』5、6 pp. 1-25、pp. 32-72

→『光海君時代の満鮮関係』1933(国書刊行会1976復刻) pp. 49-125

1937 「申忠一書啓及び圖記—清初史料の解剖—」『青丘学叢』29 pp. 1-23

1939a 「興京二道河子旧老城訪問記」『興京二道河子旧老城(建国大学研究院歴史報告第一)』建国大学 pp. 1-45

1939b 「申忠一建州圖録解説」『興京二道河子旧老城(建国大学研究院歴史報告第一)』建国大学 pp. 47-80

1933 『光海君時代の満鮮関係』大阪屋号書店 387p(国書刊行会1976復刻)

#### 今西春秋

1935c 「清三朝実録の纂修(上、下)」『史林』20-3、20-4 pp. 1-46、pp. 126-174

1938 「我国伝存の清三朝実録に就いて」『稲葉博士還暦満鮮史論叢』pp. 119-138

1967b 「満文武皇帝実録の原典」『東方学紀要』2 pp. 274-290

#### 梅山直也

2006 「八旗蒙古の成立と清朝のモンゴル支配」『社会文化史学』48 pp. 85-108

#### 浦廉一

1931 「漢軍(烏真超哈)に就いて」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』弘文堂書房 pp. 815-849

1934 「明末清初の鮮満関係上に於ける日本の地位(一、二)」『史林』19-2、19-3 pp. 246-270 pp. 534-558

1950 「明末清初に於ける満・鮮・日関係の一考察」『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』pp. 191-210

#### 江嶋壽雄

1969 「天聰年間における朝鮮の歳幣」『史淵』101 pp. 39-62

→『明代清初の女直史研究』pp. 479-505

1972 「崇徳年間における朝鮮の歳幣」『史淵』108 pp. 1-19

→『明代清初の女直史研究』pp. 509-530

1999 『明代清初の女直史研究』中国書店、1999 629p

#### 遠藤隆俊

1995 「范文程とその時代—清初遼東漢人官僚の一生—」『東北大学東洋史論集』6 pp. 434-458

#### 岡洋樹

2007 「清初のザサグについて」『清代モンゴル盟旗制度の研究』東方書店 pp. 23-74

#### 岡田英弘

1994 「清初の満洲文化におけるモンゴルの要素」『松村潤先生古稀記念 清代史論集』汲古書院 pp. 19-33

→『モンゴル帝国から大清帝国へ』pp. 441-451

2010 『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店 555p

#### 鴛淵一

1941 「界藩山行」『紀元二千六百年記念史学論文集』pp. 551-568

#### 加藤直人

1994 「中国第一歴史档案館所蔵『逃人档』について」『松村潤先生古稀記念 清代史論集』汲古書院 pp. 183-199

2007 『逃人档』東北アジア文献研究会 104p

#### 神田信夫

1962 「袁崇煥の書簡について」『駿台史学』12 →『清朝史論考』pp. 149-156

1966 「『満文老档』に見える毛文龍等の書簡について」『朝鮮学報』37・38 →『清朝史論考』pp. 128-148

1979 「『満文老档』から『旧満洲档』へ」『明治大学人文科学研究年報』20 →『満学五十年』pp. 12-48

1989 「後金国の山城、都城」『明治大学人文科学研究年報』30 →『満学五十年』刀水書房、1992 pp. 49-63

1997 「孔有徳の後金への来帰」『東方学論集 東方学会創立五十周年記念』東方学会 →『清朝史論考』pp. 179-192

1992 『満学五十年』刀水書房 289p

2005 『清朝史論考』山川出版社 451p

#### 楠木賢道

2002 「天聰五年の大凌河攻城戦とアイシン国軍の火砲」『自然・人間・文化—破壊の諸相—(大学院重点特別経費研究成果)』筑波大学大学院歴史・人類学研究科 pp. 29-42

**桂勝範**

2008 「壬辰倭乱とヌルハチ」『壬辰戦争—16世紀日・朝・中の国際戦争』明石書店、2008 pp. 396-437

**承志**

2006 「八旗ニルの根源とニル分類について」『東洋史研究』65-1 pp. 1-34  
→『ダイチン・グルンとその時代』名古屋大学出版会、2009 pp. 282-313

**鈴木開**

2009 「一六二〇年の朝鮮燕行使李廷龜一行の交渉活動—光海君時代における対明外交の一局面—」『東洋学報』91-2 pp. 1-29

**園田一亀**

1938 「李成梁と其の一族に就て」『東洋学報』26-1 pp. 89-120

**高橋匡四郎**

1941 「蘇子河流域に於ける高句麗と後女真の遺跡」『建国大学研究院研究期報』2 pp. 163-215

**田川孝三**

1934 「瀋館考」『小田先生頌寿紀念朝鮮論集』 pp. 469-544  
1932 『毛文龍と朝鮮との関係について(青邱説叢3)』161p

**田中克己**

1940 「清の太祖努兒哈赤と東部内蒙古」『蒙古』94 pp. 118-131  
1956 「清初の奴隸」『帝塚山学院短期大学研究年報』4 pp. 1-19  
1958a 「アイタの伝記—中国官人の一性格」『東洋大学紀要』12 pp. 123-130  
1958b 「通訳グルマフン」『石浜先生古稀記念東洋学論叢』 pp. 280-289

**田中宏巳**

1971 「蒙古二旗成立考」『軍事史学』6-4 pp. 53-67  
1974 「清朝の興隆と満洲の鉱工業—紅夷砲製造を中心として—」『史苑』33-2 pp. 66-82  
1974-75 「清初に於ける紅夷砲の出現とその運用(1~4)」『歴史と地理』222、224、230、232 pp. 23-30、pp. 11-25、pp. 12-18、pp. 11-23

**張徳信**

2007 「万暦末期の朝鮮使節李廷龜の赴明目的—李廷龜『庚申朝天録』を中心に—」『アジア文化交

流研究』2 pp. 353-363

**東洋文庫**

2003 『内国史院档 天聰七年』  
2009 『内国史院档 天聰八年 本文』

**戸田茂喜**

1938 「赫圖阿拉城構成の素描」『山下先生還暦記念東洋史論文集』 pp. 655-695

**内藤湖南**

1970 「清朝姓氏考」『内藤湖南全集』7、筑摩書房 pp. 312-320

**荷見守義**

2006 「ヌルハチ助兵の謎—文禄・慶長の役との関係をめぐって—」『国史研究(弘前大学)』120 pp. 31-40

**細谷良夫**

1990b 「清朝勃興期の史跡—遼東辺牆と城郭を中心に」『秋大史学』36 pp. 22-42  
1991 「『満文原档』『黄字档』について—その塗改の検討」『東洋史研究』49-4、1991 pp. 20-46  
1994 「烏真超哈(八旗漢軍)の固山(旗)」『松村潤先生古稀記念 清代史論叢』汲古書院 pp. 165-182

**増井寛也**

2008 「清初ニル類別考」『立命館文学』608 pp. 111-132  
2009 「マンジウ国(四旗制)初建年代考」『立命館東洋史学』32 pp. 1-30

**松浦章**

2007 「毛文龍の樞島占拠とその経済基盤」『明代中国の歴史的位相(下) 山根幸夫教授追悼記念論叢』汲古書院 pp. 165-180

**松村潤**

1983 「シュルガチ考」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社  
→『明清史論考』山川出版社、2008 pp. 140-168  
1988 「後金国の山城・都城遺跡の研究」『史叢』41 pp. 12-25

**三田村泰助**

1951 「清朝の開国伝説とその世系」『立命館大学五十周年記念論文集』 pp. 205-257  
→『清朝前史の研究』同朋舎、1965 pp. 1-56  
1965 「清初の疆域—申忠一の建州紀程図記を中心として」『朝鮮学報』365 pp. 93-130

→『清朝前史の研究』同朋舎、1965 pp. 400-443

### 三宅理一

2009『ヌルハチの都—満洲遺産のなりたちと変遷』  
ランダムハウス講談社 307p

### 村田治郎

1933「奉天宮殿建築史考」『満洲学報』2 pp. 1-52

### 森川哲雄

1990「オールドス部の清朝帰順をめぐる」『歴史学・地理学年報（九州大学教養部）』14  
pp. 49-72

### 森岡康

1964「丁卯の乱後に於ける贖還問題」『朝鮮学報』32  
pp. 74-111

1966「許博の疏文と贖還批判(上、下)」『朝鮮学報』37・38、39・40 pp. 225-253、pp. 238-268

1983「第二次清軍入寇後の朝鮮人捕虜の売買」  
『朝鮮学報』109、1983 pp. 29-55

1984「第二次清軍入寇後の朝鮮人捕虜の売買」  
『東洋学報』65-1・2 pp. 27-62

1985「朝鮮捕虜の清国の価格について」『東洋学報』66-1・2・3・4 pp. 455-480

1988「第二次清軍入寇後の朝鮮潜商の一管見」『榎博士頌寿記念東洋史論叢』汲古書院  
pp. 395-416

### 山根幸夫

2002「崇禎一二年山東濟南城陥落」『佐久間重男先生米寿記念明代史論集』汲古書院 pp. 321-340

### 吉田金一

1978「清軍が索倫部に留めた『兵将留守』について」『東方学』55 pp. 49-61

### 李英新

2005「清初の漢軍制度と漢軍旗人の民族的意識」  
『鶴山論叢』5 pp. 19-36

### 陸戦史研究普及会編

1967『明と清の決戦』原書房 218p

### 和田清

1938「清の太祖と李成梁との関係」『稲葉博士還暦記念満鮮史論叢』pp. 749-769

→『東亜史論叢』生活社、1942 pp. 362-379

1952「清の太祖の顧問龔正陸」『東洋学報』35-1  
pp. 40-49

→『東亜史研究(満洲篇)』東洋文庫、1955  
pp. 637-649

### Gertraude Roth

1979 “The Manchu-Chinese Relationship, 1618-1636” In *From Ming to Ch'ing Conquest, Region, and Continuity in Seventeenth-Century China*, ed. Jonathan D. Spence and John E. Wills, Jr. 3-38. New Haven and London Yale University Press